

Culture,
Energy
& Life

CEL

vol. **119**
July 2018

特集

ルネッセ

外に学び、つくり直す

Special Feature / Rebooting Japan Based on Overseas Experience



本誌では、116号から118号まで、「ルネッセ(再起動)」を統一テーマとし、日本社会が抱える問題への新たな視点を提起してきました。今119号では、世界で独自の存在感を示す国に学ぶためにイタリア、オランダ、デンマークを訪ね、課題の解決のための実践のあり方について考えました。今号から、「ルネッセ(再起動)」の実践編が始まります。

特集

ルネッセ 外に学び、つくり直す

Special Feature / Rebooting Japan Based on Overseas Experience

02 デンマークに学ぶ「豊かさ」を創造する力

[対談]

デザイン思考がもたらす豊かな教育とものづくり

シモーナ・マスキ [Copenhagen Institute of Interaction Design 共同創立者兼CEO] × 池永寛明 [大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所所長]

人間中心のまちづくりから新しい公共空間の創造へ
ゲール [Gehl]

08 オランダに学ぶ、技術と社会をつなぐ力

知的創造のネットワークを市民に開く
ワグ [Waag]

多様性がオープンイノベーションを加速する
ハイテックキャンパス・アイントホーフェン [High Tech Campus Eindhoven]

14 ガストロノミー 美食都市を歩く

—イタリアと北欧で学んだこと

20 「Learning from Japan」展

—日本のデザインを100年以上学び続けたデンマーク

ミリヤム・ゲルファー = ヨルゲンセン [デンマーク王立科学文学アカデミーリサーチャー] = 文

[インタビュー]

26 企業の海外進出を成功させるために本当に必要なこと

—ローカル・マーケットに合わせられるのが真のグローバル企業

松井忠三 [㈱松井オフィス代表取締役社長、㈱良品計画前会長]

[インタビュー]

32 いま働く大人に必要な学び

—異質なものと「対話」を通じて外部と創造する学びの提案

中原淳 [立教大学経営学部教授]

38 過去・現在・未来を貫いて、知の共同化の回路を地域・社会に組み込む

—大阪・上町台地界隈での実践から

弘本由香里 [大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所特任研究員] = 文

[レポート]

46 多様・多層的な知へ挑戦する新しい学びの場の創造

—「ナレッジキャピタル大学校」体験報告

[エッセイ]

52 自然の物語に導かれて 中上紀 [作家] = 文

[書籍案内]

54 外に学び、つくり直すための10冊

[CELからのメッセージ]

外に学びなはれ 池永寛明



表紙 / 170もの企業が集まるハイテックキャンパス・アイントホーフェン(オランダ)。敷地内には、業種を超えて人が出会い、情報を交換、協働する環境がつけられている。扉 / 産学官に市民が加わり、オープンに知識をシェアするイノベーションが行われている非営利団体ワグ(オランダ)。 © Waag (CC BY-NC-SA 4.0)



デンマークに 学ぶ「豊かさ」を 創造する力

脇坂敦史 | 構成

世界一幸福な国とも言われ、経済から人の暮らし方、食、デザインなどさまざまな領域で注目を集めるデンマーク。その「豊かさ」を育む力はどこからくるのか。コペンハーゲンにある新しいデザインスクール兼研究機関で、その独自の取り組みから世界の注目を集めるCIID (Copenhagen Institute of Interaction Design) と、人間中心のまちづくりで時代をリードする世界的都市デザイン事務所ゲール (G&E) の2カ所を訪問し、担当者にそれぞれお話を伺った。

デザイン思考が もたらす 豊かな教育と ものづくり

CIID
Copenhagen
Institute of
Interaction
Design

対談

所在地：
コペンハーゲン、デンマーク
概要：
インタラクションデザインに特化した調査・研究機関。2006年創立の新しいデザインスクールながら、世界のベストデザインスクール25 (2012年) にも選ばれている。
URL：
<http://ciid.dk/>

池永寛明
Kenaga Hiroaki

【大阪ガス株式会社エネルギー文化研究所所長】



シモーナ・マスキ
Simona Maschi

【Copenhagen Institute of Interaction Design共同創業者兼CWO】

多様なバックグラウンドをもった学生たち

池永 私たちは日本の過去と未来をつなげ、外からも学びながら新しいものを創造するために「ルネッセ」と名付けた活動を展開しています。ここCIIDで実践されているデザイン思考には、たんなるものづくりの理論であることを超え、過去のものづくりと共通するような哲学があり、新しい時代に適応するためのヒントが多くあるように感じます。CIIDは過去の何を学び、どのように新しい価値を生み出そうとしているのか？ それを、ぜひ知りたいのです。

マスク CIIDは2006年に創立されたインタラクティブデザインに特化した調査・研究機関であり、学校でもあります。ですから、私たちはデザインをするだけではなく、デザインそのものの考え方を追求したいと思っています。ここでいうデザインとは、人間の生活というものを中心においたイノベーションであり、ご指摘の通り、それは過去のものづくりとも深くつながっていると思います。

池永 創造的で魅力的なプログラムに惹かれ、日本を含めてさまざまな国から優秀な学生たちが集まっていますね。

マスク 3階建ての建物の1階部分が学校ですが、昨年も世界中から200名近い応募がありました。このうち、私たちは毎年24名の学生を選びます。けれども私たちは、能力が優れた学生を上から選ぶようなことはしません。選考過程においては、チームとして何ができるかを最も重視するのです。

池永 あえてバックグラウンドの違う学生を採用しているのですか？
マスク その通りです。国籍や性別はもちろん、なるべく違う教育を受けた人を選んでいきます。もちろん芸術的な素養をもったデザイン専攻の学生もおられますが、半分以上は技術系の学生です。

池永 それほど多様性をもった学生たちが、どのように学んでいくのでしょうか？

マスク 私たちは、「考えながら学ぶ」ということを大切にしています。そのため、チームをつくらせていくことが大切です。ここにいる人たちはみな英語を話しますが、北欧訛り、イタリア訛り、インド訛り、中国訛りなど、癖のある英語が飛び交っていますよ。けれどもその英語より、ものづくりにおける「プロトタイプ」それ自体が、最も重要な共通言語となるのです。

池永 デザイン思考では、アイデアを素早くモノの形にすることを大

人間中心の まちづくりから 新しい 公共空間の創造へ

事例 **ゲール**
Gehl

所在地：
コペンハーゲン、デンマーク
概要：
人に優しい都市空間のコンサル
タントとして世界で活躍
中のヤン・ゲール氏が主宰す
る都市デザイン事務所。
URL：
<http://gehlpeople.com/>

歩ける都市の壮大な実験

コペンハーゲンを東西に貫く約1
キロメートルほどの目抜き通りスト
ロイエは、毎日多くの人で賑わう、
ヨーロッパでも最長の歩行者天国の
ひとつとして知られている。デン
マークを代表する建築家・都市デザ
イナー、ヤン・ゲール (Jan Gehl)
氏が創立したゲールはその西端にあ
たる市庁舎広場から、少し西へ離れ
たところにある。彼の名はそのスト
ロイエとともに世界中へ広がったと
いっても過言ではない。自動車では
なく、歩く人々を主役とした都市生
活が、どれほど豊かなものか。その
思想は静かに、そしてゆっくりと世

界中の都市生活に影響
をあたえつつある。

「1980年代から
90年代にかけて、コペ
ンハーゲンは『倒産』
という言葉で表現され
るほどのひどい状況で
いたただけでなく、都
市としての魅力もなく、
誰も住みたがらないま
ちだったのです」

今は「世界一住みや
すい」とも称されるコ
ペンハーゲンの過去を
そう表現するのは、『パブリックラ
イフ学入門』の共著者でもあるピア
ギッテ・スヴァア (Bjergte Stæhr) 氏。
ゲール氏たちの詳細な調査・分析に
もとづくアドバイスが行政を動かし、
少しずつ都市のあり方を変えてきた、
その道のりをよく知る人物だ。

「たとえば、ここには自転車文化と
でもいべきものがあり、今は大き
な意義をもっています。自転車道路
が市の全域に張り巡らされています
が、これも80年代にはそれほどは
ありませんでした。私たちは、コペ
ンハーゲンをいわば実験室のような
場所として使っています。人々は何
のように公共空間を使っているの
か？ 詳細な調査を繰り返し行っ
てきました。何か新しいものをつ

くったら、それが誰にどんな変化を
起こしたのかを観察して、細かく記
録をとって伝えてきたのです」

人々はその場所で どんな時間を過ごしたいのか？

コペンハーゲンにおけるそうした
蓄積が、世界で求められるものにな
りつつある。スヴァア氏によれば、
ゲールのコペンハーゲン本社は45人
のスタッフを抱えている。このうち、
最も多いのは建築およびランドス
ケープの専門家だが、ほかにもス
ヴァア氏のような現代の比較文化や
文化人類学を専門とするスタッフな
ど、多様な知性が集う。海外からの
コンサルティング依頼が多くなった
今はニューヨークとサンフランシス
コにも支社をもち、世界各地に10名
のリーダーをプロジェクトごとに配
置して、現地スタッフとともに仕事
を行っている。

「詳細な調査やさまざまな視点から
の分析が大切なのももちろんですが、
地元の専門家との連携もひじょうに
重視しています。その場所がもつ歴
史的、文化的コンテクストを理解し
ている人々が提供してくれる深い知
を入手できなければ、真の問題解決
にはつながりません」

ゲール氏がオーストラリアのメル
ボルンに招かれ、「人間中心のまち」
として再生に関わりはじめたのが

1993年。その後、「都市生活者
が望むものを手に入れるのに、最大
でも20分しかかからないまち」を実
現したみごとな成果は、世界中で認
められている。さらに、モーターリ
ゼーションの一大中心地とも見られ
ていたアメリカ合衆国、ニューヨー
クの中心街でも2008年からブ
ロードウェイの一部を歩行者用に転
用する事業が始まり、多くの人を驚
かせた。日本はこの分野で後れを
とっているとわざわざをえないが、

2015年にUR（都市再生機構）
がゲールと連携し、東京の大手町川
端緑道で公共空間活用についての
ワークショップを開催している。

「大きなプロジェクトをやろうとす
ると、問題点の羅列になってしまっ
ていきます。私たちはそんなと
き、まずは小さなプロジェクトに
フォーカスして、そこから広げてい
くというやり方をとっています。ど
んなに小さなプロジェクトでも基本
的な哲学は同じです。人々はその場
所でどんな時間を過ごしたいのか？



今回お話を伺ったピアギッ
テ・スヴァア氏。

それは誰のためのものであるべき
なのか？ 大切なのは、人々の生活
をスタートに位置づけ、それから空
間の使い方、建物を考えていくこと
です。私たちのような建築家やプラ
ンナーと呼ばれる人たちは、この順
番を逆にしてしまいがちです(笑)」

パブリックがプライベートに 近いところで連結する

2014年にはゲール氏ととも
に来日したこともあるスヴァア氏は、
素材へのこだわりや、シンプルさを
大切にしているデザインなどに、日本文
化とデンマーク文化の親和性を強く
感じたという。

「日本でも公共空間についての考え
方に大きな変化が起きつつあるよう
ですね。けれども、個別の目的に応
じて建物をつくり……ということ
を繰り返しても、全体をまとめるよう
なマスタープランなりフレームワー
クがなければ、うまくいきません」
多くは語らないものの、彼女が垣
間見た東京の都市生活については、
厳しい目を向けているようだ。この
半世紀でコペンハーゲンが取り組ん
できた問題の多くが、そこにまだ
残っていると感じたはずだ。

「コペンハーゲンを散歩すると、よ
くアパートメントの1階にある中庭
部分が見えるでしょう。実はかつて、
そこはアスファルトで固められてい

たのですが、今は緑を目にすること
が多い。市は中庭の緑化を助成する
制度を用意し、その流れを応援して
います。また今のコペンハーゲンは
各エリアが画一化することなく、住
空間と職場の機能が混じっています
が、これは古いものの再生とは違う
レベルで、新しく生まれてきたもの
なのです」

学校があり、病院があり、図書館
があり、市役所がある……：：：そういつ
た公共空間が人々のプライベートに
近いところでゆるやかに連結して、
機能する。コペンハーゲンやメルボ
ルンに共通する都市計画のあり方だ。
最後に、日本でも話題になること
が多くなった、「スマートシティ」
についての考え方を聞いた。

「スマートシティは、あくまでも道
具でしかありません。技術を使って
人々のニーズを知り改善の役に立
てる、便利なものではない。でもそれ
だけだったら、ロボットの住むまち
のようなものでしかありません。
新しい技術というのは、使い方が問
題なのであって、大切なのは、人々
はその場所でどんな時間を過ごした
いのか？ という問いかけです」
人こそが大切であり、つねにそこ
から出発して新しいものをつくって
いく。これほどシンプルなことを持
続けていくことの重みを感じずには
られない、印象的な訪問となった。

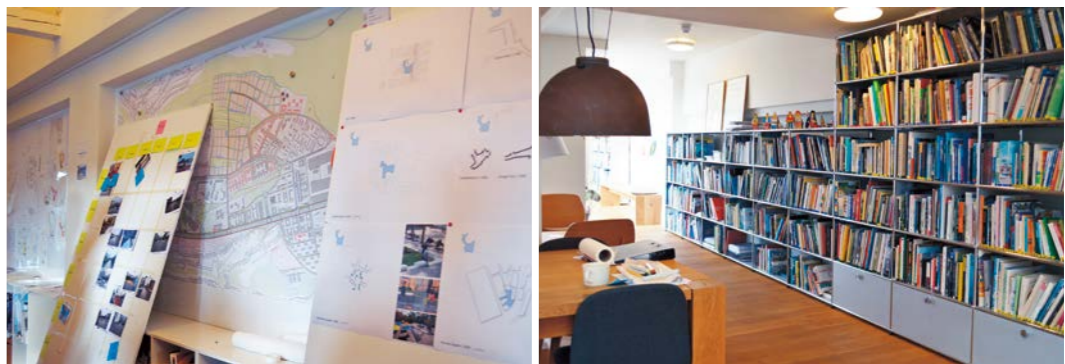
Life

Space

Buildings



ゲールのコンセプトを表した図。彼らの都市デザインはつねに人中心で考えられている。



右/ゲールのオフィスには壁一面
にさまざまな分野の本が並ぶ。
左/現在進行中のプロジェクトに
使用されているリサーチマップ。



© Waag (CC BY-NC-SA 4.0)

オランダに 学ぶ、 技術と社会を つなぐ力

脇坂敦史 | 構成

長年にわたる洪水との闘いを強いられてきた小国ながら、「子どもの幸福度」は世界一、欧米屈指の低失業率で安定感を誇るオランダ。その災害や不確定な時代を創造的に生き抜く術の一端として、産学官に市民を加えた四位一体のイノベーションを実践する非営利団体ワグと、多様な人材・企業との交流から先端テクノロジーを生み出すハイテクキャンパス・アイントホーフェンの2カ所を訪問し、責任者にそれぞれお話を伺った。

知的創造の ネットワークを 市民に開く

ワグ
Waag

所在地：
アムステルダム、オランダ
概要：
市民と先端テクノロジーを結びつけ、ソーシャルイノベーションを生み出すことを目的に活動している非営利団体。
URL：
<http://waag.org/>

歴史的建築のなかにある、 オープンな実験室

水色のゴム手袋をつけた白衣の人たちが、さまざまな試薬の入った試験管やシャーレにのった色つきの標本を慎重に扱っている……。まさに、それは「実験室」という言葉からイメージする通りの光景。しかし、ここにはなぜか訪れた人をほっとさせるような安心感も漂っている。「研究」や「開発」につきものの、秘密めいたひりひりするような緊張がないのだ。

「この部屋は、オープン・ウェットラボと呼んでいます。ご覧の通り、生物学や化学といった分野の研究を行うことができる施設ですが、ここ

で行われる実験や研究は、インターネットのストリーミングで世界中に配信されます。そういうオープンなやり方で社会的に知識をシェアするのが、このやり方です」

案内してくれたワグのディレクター、バート・テュニッセン (Bart Tunnissen) 氏によれば、こうしたラボが使われるのは、ただ市民の探究心や知識欲

に込め、楽しみを広げるためだけではない。行政や企業の依頼を受け、バクテリアの色素を使った新たなインクなど、さまざまな実用的な研究が進められているというのだ。市民に開放し、情報共有することで新しいものを生み出す。ワグはそんな創造的な「オープンイノベーション」を実践するための場所であろうとしている。

「オランダ黄金時代といわれた17世紀、この建物の1階部分は『計量所 (Waag)』として使われていました。世界初の株式会社として知られるオランダ東インド会社が本社を置いたアムステルダムにおける、いわば貿易センターのようなものでしょう」アムステルダムの市民にとって、

この場所はどうな意味をもつか？ テュニッセン氏は壁に掛けられた一枚の複製画を示しながら、その歴史的な経緯を説明してくれた。ここワグを舞台に描かれ、画家レンブラントの名声を決定的にした名画『テュルプ博士の解剖学講義』(1632年)である。

「この上階部分には外科医たちのギルドもありました。市議会の承認により、死刑にされた罪人の解剖がここで行われていましたが、参加していたのはギルドの医師だけではありません。当時アムステルダムの経済だけでなく文化的成長も下支えしていた裕福な商人たちにも見学が許され、多くの人々が最新の知識を分かち合うような形で解剖の講義が行われていたのです」

そんな最新の知識が海を渡り、やがて日本へも到達した。オランダ語から翻訳された医学書『解体新書』が出たのは1774年。日本の蘭学者たちに翻訳を決意させた理由が、何よりも解剖図の正確さであったことは有名だ。

市民を中心に社会的課題の 解決法を考える

「計量所 (Waag)」の名をもつ非営利団体ワグがこの地で活動を始めたのは、1994年のこと。最初の仕事は、アムステルダム市民の

「公共の場」として、当時としては先進的な、ウェブサイトを立ち上げることだった。市民とともに最新の情報技術をもった大学・企業の人たちと、人文科学系の学者やアーティストなど、異なるバックグラウンドをもつ人たちが協働した。こうして培われたワグの特色は、今もしっかりと引き継がれている。

21世紀に入り、ヨーロッパでも先駆的な試みとして、いち早く「ファブラボ」をつくった。市民が自由に利用できる「ほとんどあらゆるもの」



右/今回お話を伺ったバート・テュニッセン氏。
左/壁に掛けられたレンブラントの複製画『テュルプ博士の解剖学講義』。



VRを用いた幽体離脱の体験の様子。死の恐怖の克服を目指して開発された。
© Waag (CC BY-NC-SA 4.0)

をつくるための施設だ。今では当たり前となった3Dプリンタやデジタルスキャナーといった最新のツールをつぎつぎと導入し、それらを市民に開放する。もちろん、その成果は誰もが分かち合えるようにした。「ソフトウェアからハードウェアへ、私たちの関心領域は徐々に移ってきました。さらに最近ではウェットウェア、つまり人間の体を研究するライフサイエンスへと広がっています。ですが、やろうとしていることの基本は同じです。知識をつくるために協力し合いながら、新しいものを生み出していく。私たちがしているのは、

テクノロジーや科学とアート、文化を結びつけることなのです」

ワグで行われているこうした営みを、既存の枠組みを使って説明するのは難しい。あえて言葉にしようとするなら、それは教育を行いながら、これまで関係をたななかった人やグループ同士を結びつけ、さらに協働して新たなアイデアを生み出すとするような試みだ。それは市民の自発性や楽しみにもとづく活動であると同時に、企業活動にも、国や地域が目指すよりよい公益サービスにもつながっていく。

「イノベーションにおける支配的なモデルはこれまで、産官学の三位一体でもいうべきものでした。私たちの提案する『阿姆斯特ダム・アプローチ』は、ここに市民を加えた四位一体です。未来への解決法となるデザインには、ユーザー（市民）を取り込むべきだと思います。ユーザーがその中心にいないければ、本当の意味でよい解決法にはならないからです」

過去と現在をつなぐための場所

新しいテクノロジーを生み出し広げていくために、市民が参加するオープンな形での協働を促すことの重要性は理解できる。しかし、そこにアートや文化といったものが、ど

のように関わってくるのだろうか？

「画家レンブラントが、350年以上も前に描いた絵の通りだと私は思います。彼らの表情のなかにあるのは、解剖された人間の体を前に見せる好奇心や興味ではないでしょうか。技術革新を生み出すようなアイデア、あるいは映画や音楽、日本のマンガといった表現においても、すべての革新的なものを生み出す源泉は同じでしょう」

「興味」や「好奇心」を重視するワグでは、医学、数学、物理学、生物学、工学など、さまざまな分野で活躍する専門家が協働する。そして、社会的な課題と技術を結びつけ、魅力的なプログラムをつくるうえでアーティストや人文科学の学者といった人々が大いに力を発揮しているようだ。

「さまざまなバックグラウンドをもつ人たちをつなげ、接点をつくるのが私たちの役割です」と語るテュニッセン氏も、もともと経済や法律といった分野の専門家だった。市民が参加することのできるプログラムをつくりながら、それを企業経営や自治体の運営にとって役立つ研究レポートにまとめあげる。そうすることで、この非営利団体が行う「草の根」運動のなかに独自の財源を生み出すための資金の循環をもつくり

出せる。自らの仕事を「翻訳家か通訳のようなものですね」と笑いながら、資金的な自立がなければ政治や企業から独立した存在であり続けることはできない、と胸を張った。

その多くが重層的な目的と意味合いをもつワグのプログラムは、大きく4つのカテゴリーに分けられている。子どもたちに知識を伝える教育としての「学び」、コンピュータの本質を考える「コード」、インターネット時代の新しい方法を取り込んだ「ものづくり」、高齢社会における健康の維持と助け合いを考える「ケア」。

そこには、技術ありき、社会問題ありきの「インターネット時代の法律」「最新の生命科学」「人工知能と雇用」といった日本の市民講座で見られるような場当たりの「お題目」は存在しない。市民（ユーザー）が中心となり、その知的関心を刺激しながら人々をつなげ、日本のように高齢社会対応だけでなく、子どもの育成をも重点的に図るような魅力的なプログラムが並んでいるのだ。ワグはこうした手法を用いて、レポートが描いた過去を現在へとつなげている。ここに集う市民たちの真剣で楽しそうな表情のなかに、新しいものづくりと問題解決のヒントがあるのだと感じた。

多様性がオープンイノベーションを加速する

ハイテク
キャンパス・
アイント
ホーフェン
High Tech
Campus
Eindhoven

所在地:
アイントホーフェン、オランダ
概要:
世界中から200近くの企業や研究機関が集まるキャンパスで、日々1万人以上の人々が技術開発と研究に取り組む。次のシリコンバレーとしての呼び声も高い。
URL:
<https://www.hightechcampus.com/>

パス（HTC）・アイントホーフェンだった。「20年ほど前、ここには、ひとつの企業のひとつの研究所しかありませんでした。2018年現在では170もの企業が集まっています。閉鎖的な研究開発から、外へ向かって開かれたオープンイノベーションへの大転換が起きたのです」

急激な変化を要約し

企業城下町のフェンスが引き倒された

20世紀から21世紀へ。オランダ南部のアイントホーフェンは、時代の変貌を最も印象的な形で体現した都市かもしれない。かつてそこは、総合電機メーカーとして世界にその名をとどろかせたフィリップスの企業城下町だった。しかしフィリップスは21世紀に入ると不採算部門の売却を進め、現在までにヘルスケア製品・医療関連機器のメーカーへと生まれ変わった（2001年に本社は阿姆斯特ダムへ移転）。巨大企業の研究開発部門がつぎつぎと解体していく過程でアイントホーフェン中心部につくられたのが、ハイテクキャン

てくれたのは、HTCの事業開発ディレクターを務めるセース・アドミラル（Cees Admiraal）氏。今、ここには「母体」となったフィリップスグループのほか、IBM、Intel、Canonなどの企業や研究所がつぎつぎと立地し、1万人以上の研究者と技術者、それに起業家たちが働いているという。印象的なのは、「研究都市」というような言葉からイメージされるような静謐さよりも、何かが起こりそうな活気にあふれた躍動感、そして何よりも人の多様性だ。アドミラル氏によれば、キャンパスが約1キロ平方メートルと全体がコンパクトに設計されているのも、人と人を結びつける意図があるからだという。



上/キャンパス内は世界中から集まった多様な人たちが賑わう。右下/ハイテクキャンパスの入口ゲート。左下/今回お話を伺ったセース・アドミラル氏。

「それぞれの建物には食堂をあえて置かず、キャンパス内にあるレストランがある建物に人が集まるようにしています。ランチやディナーは出会うための重要な機会でもあるのです。ほかにも、さまざまなイベントを提供して情報交換やコネクションづくりをするためのカジュアルな場をつくるのが、私たちの重要な仕事

です。異なる人々が出会い、刺激し合い、情報を交換し合い、協働できるような環境。私たちはここにひとつのエコシステム（生態系）をつくらうとしています」

フィリップスが取り入れたのは、カリフォルニア大学バークレー校教授のヘンリー・チェスブロウ（Henry Chesbrough）氏が提唱する「オープン



上/水辺が印象的なハイテクキャンパスの外観。
下/レストランが集まる建物では異なる人々が出会い、情報交換が行われる。

「インノベーション」という考え方があった。自社のなかに囲い込むという従来の研究開発にかわり、大学や研究所だけでなく、ほかの企業、とりわけスタートアップ企業との連携を積極的に活用していく。チェスブロウ氏は、フィリップスで起きた変化を「まさにフェンスは引き倒された」と表現したそうだ。

「屋上に構造物が見えるでしょう？ 私たちがオープンラボと呼ぶあの場所も、かつてはフィリップスの研究室でした。それを中小企業

の研究者、スタートアップの起業家に開放したのが、最初の重要なステップのひとつとなりました。先端的なテクノロジーを生み出し、商品開発を行うということは、企業同士の競争でもありますが、より大きな目で見ると、新しいものが持続的に生み出されるような場をつくることの方が大切なのです」

国が後押しする エコシステムから生まれる アイデア

アメリカの経済誌『フォーブス』

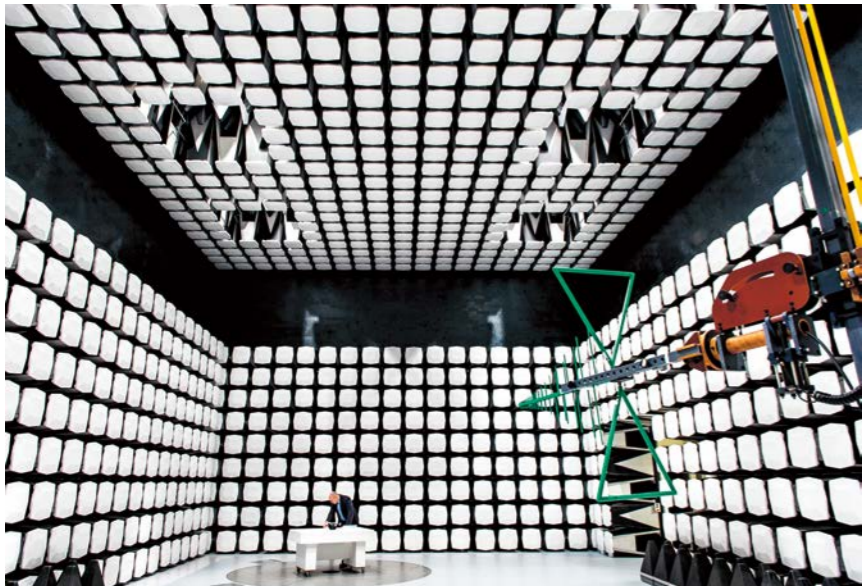
3日で使い捨てできるようになっています。これなら、本来ならまだ胎内にいるような小さな赤ちゃんに与えるストレスも少なく、母と子が直接肌を触れあわせるカンガルーケアの妨げにもなりません」

この小さな開発チームにもオランダ人やイギリス人、イタリア人、ジョージア人、そしてインド人の技術者が参加しているという。ハイテ

クキャンパスのなかを少し歩きまわるだけで、さまざまなレベルの技術開発に多様性が息づき、絡み合いながら、有機的なエコシステムを形成しているのが感じとれる。

21世紀の港、ブレインポートの あるべき姿

「私たちは多様性がベストの結果をもたらす、ということを確認してい



上/キャンパスにはさまざまな最新テクノロジーが揃う。
下/お話を伺ったバンビメディカル社の女性たち。

によれば、アイントホーフェンは人口1万人あたりの特許数が22・6件で「世界一の発明都市」(2013年)。巨大企業再生の過程から生まれた流れを、行政も積極的に後押ししている。2004年から、オランダ政府はHTCを含むアイントホーフェン中心部を「ブレインポート(頭脳の港)地区」として整備している。これは企業と知識集約型機関(研究所など)、そして公的資金を組み合わせさせて経済活動を促進するもの。ブレインポートはいまや、アムステルダム(空港IIエアポート)、ロッテルダム(海港IIシーポート)と並ぶオランダ経済の3本柱と位置づけられているのだ。

アドミラル氏に案内され、オランダのTNO(応用科学研究機構)とベルギーの国際研究機関IMECが共同で設立したホルストセンター内部も見ることができた。この研究所の特徴も、幅広い連携を目指したオープンイノベーションと、製品化までを視野に入れた企業の支援だ。ここには28カ国から200名を超える専任スタッフが働いており、50社以上の企業がパートナーとなっている。

「ここでフォーカスされている研究分野のひとつに、自律型センサーのネットワークやフレキシブル・エレクトロニクス(柔軟に曲げられる電子)があります」

アドミラル氏はその多様性の中身を重層的に捉えている。働く人の国籍、性別はもちろん、その立場や役割も異なる人々が集う場をつくっていく。たとえば、フィリップスやIBM、Intelなど革新的なものを生み出そうとする力の源泉となるグローバル企業には、先見性と同時に安定と持続性がある。ホルスト

センターのような国レベルの研究所にも、より広く世界中とつながるパートナーシップを求めよう。こうして、国内の中小企業を呼び込むとともに、アイデアの実用化に不可欠なマーケティング、特許、金融などのサービス企業も引き寄せられる。これらが揃うことで、初めて個性的なスタートアップ企業も生まれ、新しい技術を使った新しい商品が次々と開発されることが可能となる。

「テクノロジーの世界における競争というのは、最も高度で質の高い企業が勝つとはかぎらない、不思議なもの

回路やディスプレイなど)があります。そんな新しいアイデアが、どのような形で実用化されようとしているか、それもぜひ見ていってください」

ホルストセンターのような国が設立した研究所のいわば「お隣」に、スタートアップ企業を育てるインキュベーターやアクセラレーターのような場所がいくつもあることに驚かされる。紹介されたのは、アイントホーフェンに数多くある意欲的なベンチャー企業のひとつで、新生児集中治療室などで使われるモニタリング用のシステムを開発しているバンビメディカル社だ。

「小さな体のあちこちにべたべたとセンサーをとりつけ、重いチューブや線につながれた未熟児の姿をご覧になったことがあるでしょう。もっとも、新生児専門の医師が赤ちゃんにとつてストレスの少ないモニタリング機器をつくろうと考えたことから始まった開発なんです。最初は、ジャケットのようなのを考えていました」

バンビメディカル社の女性スタッフが見せてくれたのは、小さな細い腹巻きのようなもの。この中に、柔らかいフレキシブルな電子センサーが埋め込まれ、小型のモニターにさまざまなデータが無線で送られるようになってい

「衛生上の理由から、このベルトは

です。最終的には、人々をテクノロジーのマーケットに取り込むことの上手な企業、つまり技術・商品をつくるユーザーに紹介することのできる企業が勝つのです。その意味でも人と人が出会い、日頃からコミュニケーションをとり、知識を交換することが大切だと思っています。技術と人のニーズは、そうやってつながっていくものだと思うからです」

話を聞きながら、明治時代に来日したオランダ人土木技師たちの力で淀川の治水と大阪港の港湾機能が高められ、大阪が日本最大の貿易都市となったことを思い出した。かつて「天下の台所」と呼ばれ、戦前には「大阪」と称された繁栄もまた、さまざまなレベルの多様性がぶつかり合い、情報が行き合うことで生まれたものだった。そのことを話すと、アドミラル氏は「つまり、私たちは昔からあったアイデアを現代化しているわけですね」と大きく頷いた。

海港と空港に次ぐ、外に開いた窓としての「ブレインポート」をつくる最大のヒントは、誰もが知っていて、それでも頭を悩ませる「多様性・人と人の交流・学びあい」のなかにあるのかもしれないと考えさせられた。



ガストロノミー — 美食都市を歩く — イタリアと 北欧で学んだこと

池永寛明 | 取材執筆

グローバル時代における「都市」のあり方を考える際、近年においては人々の生活文化をかたちづくる「食」の重要性はますます高まっていると言っても過言ではない。都市における「食」とは何かを考えるため、CELの池永寛明所長が海外の美食都市を巡り、日本における食と都市・地域文化の関係について考えたことを伝える。

昨年度の情報誌『CEL』（116〜118号）では、創刊30周年を迎えて、これからの日本を考えるために「ルネッセ (Renessé / 再起動)」—— 私たちの生活文化の基盤「都市」

にある本質を過去より掘り起こし、現代・未来へとつないでいく——という考え方を提唱してきた。そして、続く実践のための準備段階に入った今年1月と3月、イタリアとオランダ、デンマークの都市を歩いた。イタリアは、「食」による地域文化」をテーマにした調査であったが、北欧においても、先に掲載しているイノベータータイプな動きのひとつに「食」があったことを知り、そこから都市・地域のあり方をめぐる議論につながる流れを見ることができた。これは、今後の日本のあり方を考えるうえでも有益なヒントになるのではないだろうか。

各都市で異なる「食」の位置づけ

今回訪れた都市のなかでも、イタリアのパルマやデンマークのコペンハーゲン世界的な「美食都市」と呼ばれている。美食都市の定義ははっきりしないが、たとえばユネスコは、「創造都市ネットワーク」という都市間の戦略的連携を図る一環として、ガストロノミー（食文化）を都市戦略に組み込むなど、広義に

「食」を見直す動きを示している。日本では唯一山形県鶴岡市がその取り組みを行っているが、どれだけの人々が都市戦略としての食を認識し理解しているのだろうか？

そもそもイタリアやフランスなどは古い時代からの美食の歴史があり、多くの観光客が食を楽しむために訪れ、料理人もイタリアンやフレンチを学びに世界中からやってきている。私たちがそれをヒントに新たな取り組みを行っていくうえでも、なぜこれだけ継続され、発展し続けることができるのかという文脈・本質を探ることができなければ、いくら「美食都市を目指そう」と声を上げて、表層的なものになってしまいかねないだろう。

そんな日本の食の課題について考えながら歩いていたいせいか、イタリアのまちなかで日本食らしき飲食店が多々目につく。2015年のミラノ万博で日本料理がブームになって以降、イタリアのみならず世界中で「日本料理」的なレストランや寿司店が増えていることは、ニュースなどで知っているが、さすがにここまでとは思っていなかった。世界最古の金融都市であるシエナでは「OSAKA」という看板が目につき思わずスマホのカメラを向けた。ミラノでは回転寿司屋や、珍しいところではおむすび専門店なども目に

した。しかし、店内をよく見るとちょっと様子が変なのだ。

話を聞いてみると、中国や韓国の企業によるものが多く、大成功しているとのことだった。もちろん日本人の料理人たちも進出し本格的な日本料理店を営んでいたり、外国人のシェフたちも日本料理の味の強みである「UMAMI」について真剣に研究し、彼らの料理に取り入れているのも事実だ。しかし、その一方で正しい日本料理店とは言えない店が急増していて、しかも多くの観光客が食ベにきていているという事実がショックを受けた。

とはいえ、イタリアのまちは歴史に彩られた景色が美しく、ここで見られない光景もたくさん目にすることができた。

中部の都市フィレンツェで、サンタンブロージョ市場を訪れたのだが、そこでは日本のスーパーとは違い、パッキングされていないむき出しのままの、いかにも元気がいっぱいといった色鮮やかな食材や加工品が平たい積み上げられていた。いわゆる観光市場ではなく地元の人たちが毎日通う生活に密着した市場なのだが、そのすぐそばに「バル」を見つけた。イタリア語で「bar」と書くが、一般的なバーとは異なり、エスプレッソがメインの軽食喫茶店といった趣きで、イタリアのまちは

右/パルマで見かけたガストロノミーのフラッグ。
中/色鮮やかな食材が美しいサンタンブロージョ市場。
左/フィレンツェで訪れたバルの店内。



よく見かける業態だ。

朝8時過ぎ頃だったが、すでに多くの人が集い賑わっていた。そんななかで私が驚いたのは、出勤前らしきサラリーマンたちが、そこで朝のミーティングをしているということだった。幹部が話すのを準幹部がメモを取りながら聞いている。日本であれば会議室で慣例的にやっているような打ち合わせを、パールでコーヒーを飲みながら行っている。周囲は特にオフィス街ということでもないため、出勤前にいつも立ち寄りのお気に入りのパールがあり、そこが仕事場以外の重要なコミュニケーションの場になっているのだろう。

後にもふれるが、イタリア発祥の「スローフード」の考え方が生み出されるきっかけになったファストフード店のような全国展開規模の企業は少なく、加えてパールは個人経営のようないところが多いため、それぞれ個性を出し独自のスタイルで経営していて、それを気に入った客が通い続けお店を育てているという印象だ。パールは都市・地域の顔であり、地域循環・住民交流の拠点となっている意義は大きい。

なお、このような「パール」という形態のほかに、イタリアでは高級レストランを「リストランテ」、大衆料理店を「トラットリア」、居酒屋を「オステリア」、ほかに「ピッ



上/イタリーの店内。イタリア産の食品が所狭しと並べられている。中/パルマで立ち寄った食品店のハムやチーズが目玉。下/フィレンツェで食したトスカーナ地方の伝統料理「リボリータ」。

ツェリア」「エノテカ」など、それぞれのライフスタイルに応じて食の場が設けられている。当然ながら、レストランやトラットリアは家族や友人・知人とともにディナーを楽しむ場だ。ディナーは19時30分頃に始まり、3〜4時間そこで食事と会話をゆっくり楽しんだ後も、話し足りずにパールに立ち寄ってから帰宅するというライフスタイルが定着している。

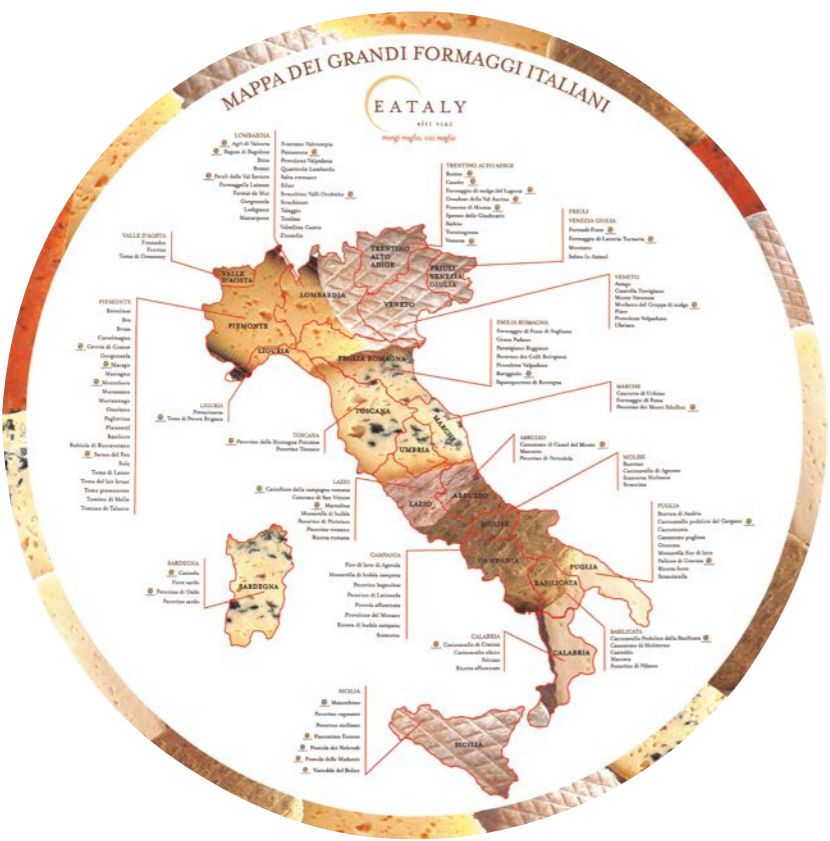
そしてそれは夜だけに限らない。ランチも13時30分〜15時という遅めの時間に家族と一緒に過ごす。そのため小・中学校の授業は午前中までのところが多く、祖父母が学校に迎えに来て、一緒に歩いて帰る。親も

仕事場から家に帰ってきて家族一緒にランチをとる。

イタリアでは、2、3世帯同居、家族同居も多いことがこのライフスタイルを可能にしているのだが、それだけではなく、重要な鍵は各都市に優秀な大学があるということだ。シエナ大学やフィレンツェ大学など、教育が非常に大切にされており、地域の産業育成とともに豊かな生活・社会を形成するための二大基軸となっている。子どもを地域の学校で学ばせ、地元で勉強させ、卒業後も地元の企業に勤め、地域の学校で学び直すといった「地域経済が循環するしくみ」が機能している。このようなしくみは、後に訪れるア

しやれなレイアウトで見せていて、眺めているだけで楽しくなる。イタリアでは各地域ごとにこれだけ明確に地域独自の食材をあらわすことができる、その底力こそイタリアの食文化の厚みと強みがあるように感じられた。と同時に、日本の問題は、こうしたかつてあった地域に根ざした食文化が弱くなってしまったことだと直感した。

この「食材絵図」は「スローフード」の運動を立ち上げた協会が監修



イタリーで入手した食材絵図のひとつ。チーズの種類が産地ごとに分類表示されている。

したものが、彼らは70、80年代に台頭してきたファストフードに対抗し、その土地の伝統的な食文化や食材を見直すことを目的に始めている。そもそも今のイタリアより前の、国家として成立する以前の時代があったことを考えれば、それぞれ地域ごとの料理があるのは当然のことだ。たとえば、メデイチ家が作りあげたフィレンツェを含むトスカーナ地方の伝統料理に「リボリータ」がある。かたくなったパンを野菜スープに入れ、水分を吸わせて腹もちをよくする料理だが、世界における最も美しいまちのひとつであるフィレンツェには一見相応しくないような質素な料理だ。しかし、それは美しいフィレンツェをつくるために、大理石を切り出し運河で運び、教会をつくるための大量の労働者が必要だった200年間の歴史的経緯があったこそ生まれたものだ。ほかにも力になりやすい内臓料理（トリッパ）や疲労回復のために塩分が濃いめの味つけなどが特徴の数々の「男性的」料理が残っている。一方、ひとつ山を隔てただけの金融経済都市パルマでは、それとはまったく異なる「優しい」料理が多い。このように、都市ごとに食材、食品加工品、料理もそれぞれ異なっているのだ。各都市・地域で栽培され収穫できる食材の違いと、各都市の成立のし

ムステルダムやコペンハーゲンでも同様に見ることができる。日本も、かつては多世帯同居が当たり前で、みんなで食卓を囲んでいた歴史があったが、戦後一気に失われた。イタリアは日本と同様に数多くの浮き沈みがあったが、食を軸とした家族のつながりを大切に守り続けている。パールに集まったり、家族と一緒に食事をする食のスタイルや大学、地域経済循環も含め、日本との差を感じずにはいられない。

各都市・地域に根ざしたイタリア料理

ミラノで「イタリー（Eataly）」というショップに立ち寄った。「ス

かた・歴史の違いが独自の料理を生み出し、それが現代に脈々と継承されている。そのことから、イタリア料理はフレンチと同様に貴族社会が発展させてきたことは事実だが、高級なよそいきのものとして発展してきたのではないことがわかる。同行いただいたイタリアンシェフの永松信一氏（『CEL』118号に登場）は「その大前提に『マンマ（ママ）の料理』があるのだ」と話されていたが、やはりここからも、イタリアでは家族や仲間同士など、愛する人とのコミュニケーションの場に食が密接に結びついている歴史の蓄積がうかがえる。

都市ブランドをつくり、育てる

イタリーのチーズの食材絵図を眺めていると、優しい料理が多い都市パルマには「パルミジャーノ・レッジャーノ」の記載があった。イタリアチーズの王様とも呼ばれるようなメジャーなチーズだが、よく見ると、こういった地域の食品加工品には、「DOP（原産地名称制度）」のマークが刻印されている。これは原産地にこだわり、牛のサイズ、品質が指定されたものみに許される、いわばブランドの証しだ。もともと飼いが家畜に独自の刻印をしたことがブランドのいわれとなっている

「Learning from Japan」展

—日本のデザインを100年以上学び続けたデンマーク

ミリヤム・ゲルファアー＝ヨルゲンセン
Mirjam Gelfer-Jorgensen

2015年からデザインミュージアム・デンマークで開催され注目を集める「Learning from Japan」展。日本とデンマークの結びつきの歴史をたどる企画展である。観客を驚かせるのは、世界中で評価が高いデンマークデザイナーの源流が日本にあったということだ。本展を企画したミリヤム・ゲルファアー＝ヨルゲンセン氏に、展覧会の内容をもとに、過去と未来、内と外の文化的交流のあり方を論じていただく。

写真提供 = Pernille Klemp

ミリヤム・ゲルファアー＝ヨルゲンセン
1939年生まれ。文学博士。元デザインミュージアム・デンマーク図書館長兼デザインミュージアム・デンマーク副館長、コペンハーゲン大学助教授。現在はデンマーク王立科学文学アカデミーでリサーチチャーを務める。「Learning from Japan」展のキュレーションを担当するほか、文化人類学的な視点からアート関連の著作を多数執筆している。代表的著作に『Influences from Japan in Danish Art and Design 1870-2010』(2013)がある。

展覧会開催の背景

拙著『デンマークの芸術とデザインに見る日本の影響 1870〜2010』(Influences from Japan in Danish Art and Design 1870-2010)』(The Danish Architectural Press, 2013) が出版された2年後の2015年、デザインミュージアム・デンマークにて「Learning from Japan」展が開催された。ミュージアムの所蔵品である興味深い新旧の日本美術のコレクションには、20世紀のシンプルな伝統工芸品も含まれ、その多くは未公開のものであった。私はかつての同僚から同美術館において拙著に基づいた展覧会の展示企画を依頼された。この展覧会における主たるテーマは、これまでのミュージアムの館長がどのようにして日本の芸術作品を収集したかということ、そして、古いものや特に現代の作品コレクションが、現代的なデザインとどのように共存し続けるべきかを示すことにあった。写真やウェブで見るとよりは、直接手に

取ることができる実物の方が、アーティストやデザイナー、研究者により多くのインスピレーションや新たなアイデアを与えうることは疑いの余地がない。現代のデザイナーにひらめきを与えることが、デザインミュージアムの使命なのだ。展覧会では、書籍や画像資料も含め、ミュージアムの収蔵品から日本とデンマークにまつわるコレクション400点以上が展示された。ミュージアムではこれまでの125年間、デンマークの装飾芸術やデザイン作品を多数収集してきたが、そのコレクションの大部分で日本美術から影響を受けた作品を見出すことができる。元となった日本の作品とそこから生まれたデンマークの手工芸品とを並べて展示することで、デンマークのアーティストやデザイナーが受けたインスピレーションの源泉を示すことができた。展覧会はデザインミュージアム・デンマークの創立125周年記念行事の一環として開催され、また、2017年には、日本とデンマークの通商150周年記念行事となった。2015年の開催以来、予想

以上の入場者で賑わい、開催期間は延長され、現在も続いている。訪れた人たちの多くは、デンマークの有名な手工芸品やデザイナーが、日本の芸術や工芸品と密接な関係を持つことに驚いた。

日本芸術との出会い

1880年代、デンマークは、西洋諸国の間でも、いち早く日本芸術のさまざまな基本的な特徴を取り込み、そのインスピレーションを自分たちの新しい表現形式へ変化させた。日本芸術との出会いは、デンマークの芸術と工芸品に刺激を与え、特に装飾的芸術やデザインの分野では、新しい芸術的効果としていち早く取り入れられた。ジャポニズムはデンマークの芸術の触媒として作用し、長期にわたり影響を及ぼした。つまりジャポニズムは、20世紀にデンマークがデザイン大国となるモダニズムの重要な前提条件だったのである。

開国した近代日本に関するデンマーク最初の記

述は、1863年にウィリアム・カルステンセン(William Carstensen) 大尉により執筆された『日本の首都と日本人』(Japan Hovedstad og Japanserne)とされている。この本でカルステンセンは、日本という国や日本人、その風習や住居、美しい品物が並ぶ商店などに対する感動を綴っている。特にカルステンセンを魅了したのは、日本の織物や衣服であり、著書でも詳しく記述されている。「完成度の高い境地」という彼の言葉は、日本の衣服に見られる細やかな芸術の見事さを表している。

他のあらゆる西洋諸国と同様、デンマークが日本から輸入した物はすべて、日本で輸出用として作られたものだった。1877年には、コペンハーゲンのコンゲンス・ニュトルウ広場に面する商店で、日本の美術や工芸品、特に漆器が宣伝されていた。1889年には、日本製品を購入してきたマガサン・デュ・ノール百貨店のクリスマスの展示会で、「これまでにない低価格。パリ万国博覧会にて中国・日本から出品された、全く斬新なフォルムと色彩の工芸品が勢ぞろい」と日本製品が宣伝された。新しい表現形式が普及するには、

まずはその端緒となる出来事が必要だが、日本の芸術がデンマークを席巻した時期がまさにそれに当たる。1830年代の終わりから1910年頃にかけて、複雑な様相を見せた時代となった。伝統的な様式は常に「新たな様式」にインスピレーションを与えてきたが、新様式は常にその元となったオリジナルと表面的には多くの点で類似しながらも、その表現や全体の印象は異なる。デンマークの芸術家たちは、まず、日本の芸術の「エキゾチックな」モチーフ全般に魅了され、やがて自然を取り入れた日本のモチーフを表面的にはなく持続的に取り入れるようになった。最終的に、日本の芸術家の洗練された材料、技術やその過程に注目し、それは現在でも続いている。

ジャポニズムの作用

ジャポニズムはまず、デンマークの新しい様式を生み出すうえで決定的な役割を果たした。ジャポニズムは多くの面でデンマークの土地によく馴染み、以来、デンマーク人の世界を特徴づけるも



金、銀、赤の浮き彫り細工が施された
漆塗り硯箱

19世紀初頭
デザインミュージアム・デンマークの歴代館長が
収集してきた日本の芸術作品のひとつ。
所蔵 / Kunstindustrimuseum
©Designmuseum Danmark



釉下彩磁器の花瓶

アーノルド・クログ作
王立磁器製陶所 1888年
鯉は日本のモチーフのひとつだった。
所蔵 / Kunstindustrimuseum
©Designmuseum Danmark

のとおり、やがて20世紀にはデンマーク人のアイデンティティの一部となった。芸術とものづくりとを融合させた日本文化が、当時西洋諸国で確立しつつあった工業製品を補完するものとして、西洋の多くの人たちが求めていたものと合致していたことは疑いの余地がない。一方で、一部のアーティストからは広重や北斎といった日本のモチーフを単純にコピーしただけのジャポニズムが垂れ流されることに対する批判もあった。西洋の応用美術の活性化は、日本の芸術の本質に学ぶことによって実現されなければならなかった。それは決してジャポニズムの初期の表現のような、魂のない模倣であってはならないのだ。

1885年は、さまざまな点からデンマークの装飾美術の転換期となった。この年、カール・マッセン(Karl Madsen)の日本美術に関する著作が出版された。そして、ピエトロ・クロロン(Pietro Krohn)がビング&グレンダール社の製陶所の芸術監督に、さらに若き建築家にして画家であったアーノルド・クログ(Arnold Krog)が王立磁器製陶所の芸術監督に就任した。デンマー

クの装飾美術で、最初に極東アジアからの影響はつきりと体现したのは、陶芸の分野だった。製陶所の歴史における中心的人物だった前述の二人のやり方は、それぞれ異なるものだったが、そこに共通しているのは自然に対する新しい見方だった。温暖な地域から北欧に持ち込まれた栽培植物を野生植物が駆逐するように、魚、昆虫や爬虫類などのモチーフが受容されたのである。こうした参照関係は展示の中で分かりやすく示されている。「古典主義から抽象へ」は、トルバル・ビネスブル(Thorvald Binesbøl)がそのクリエイティブな想像力によって成し遂げた最高傑作の見出しとしてふさわしいのかもしれない。ビネスブルの装飾的な抽象化には、刀の鍔の渦巻き紋様との類似があり、また彼の本の装丁には、日本の漆器に見られる雲の装飾との関連を見出すことができる。一般に、「動き」は日本美術の要素であり、例えば重なった着物の襷や、屏風絵における水の描き方などに見られる。ビネスブルの膨大な作品から選ばれたこれらの例は、展示のハイライトである。なぜなら、ジャポニズムこそが自然主義から彼を解き放つうえで重要な刺激となったはずであり、それは今でもその時代の基本的な評価基準であるからだ。

ジャポニズムは多方向的な活動として捉えなければならぬ。同時に、個々の芸術家の作品においては、ジャポニズムは他のトレンドと共存可能である。それゆえに、展覧会では、デンマークの芸術や設計図、デザインが19世紀末から現代に至るまで、日本の事物から決定的な影響を受けながら発展していった歴史の概略を把握できるように、(他のトレンドとの融合が見られる作品においても)ジャポニズムに焦点を当てていることを強調して

おく。

20世紀の到来とともに、新たな段階へ

先行するものに新たな段階が積み上げられ、次へと導かれるように、20世紀の最初の10年間にジャポニズムは新しい局面を迎えた。特に目を引くのは、初期のジャポニズムからの飛躍的な変化である。この時代、19世紀の工業化を経て見られるようになった素材を用いた芸術作品をはじめ、表現形式の大きな変化の機運はすでに熟していた。そうしたなかで、材料の特性に対する日本のデザインと感性は、芸術家たちに新しい道を示したのだ。20世紀を貫くデンマークの芸術的なデザインの赤い糸とも言えるべき一般的な特徴とは何か。それは実用性を基本としつつも、芸術作品として制作され、素材と使用方法を通じて美的な経験を伝えようとする方法を振りどころとしている、ということである。拙著と展覧会はいずれも日本からの影響に焦点を当てているが、それは日本のデザインがデンマークの芸術家たちを魅了し、影響を及ぼしたことが明らかだからである。しかしこうした流れは後にモダニズムや機能主義と呼ばれる、さらなる簡素化を目指した一般的なスタイルの潮流と密接に関係したものであった。

ジャポニズムを次なる段階へと導いたもうひとりの重要人物は、建築家カール・ペーターセン(Carl Petersen)である。彼は20世紀初頭に陶器作品を制作したが、最も古い作品は青白い釉薬の上に緑釉を重ね塗りしたものだった。カール・ペーターセンは日本の茶碗や漆器、シンプルながら家紋(花のモチーフを様式化したデザインであることが多い)などに着想を得て、小さくシンプルなモチー



釉薬で彩色された炆器の金属製蓋付きポット

パトリック・ノルストローム作(蓋はジョージ・ティールストルブ[Georg Thylstrup]作)
王立磁器製陶所 1913年(左2点)、1911~12年(右2点)
ポットは茶入の形状にヒントを得たもの。
所蔵 / Kunindustrimuseet
©Designmuseum Danmark

フを自身の作品に取り入れた。そして、これを契機とする簡素化の流れは、デンマークと日本の繋がり新たな段階へと導くことになった。

デンマークの炆器(stoneware)生産を高い水準へと引き上げた芸術家はパトリック・ノルストローム(Patrick Nordström)だった。彼は1898年から1900年にかけてパリに滞在し、そこで日本の炆器に出会い、釉薬から形にいたるさまざまな点で日本の形式から影響を受けた。

建築とインテリアへの影響

日本の影響をはっきりと認めることができ、しかもその影響が長期にわたって重要であり続けた分野として、20世紀半ば以降のデンマークの戸建て住宅があげられる。建築家たちは、周囲に開かれた空間という新しい考え方とより開放的な間取り図とをまずは自らの住居で実践した。

日本建築における木や竹や紙といった素材の使い方によって、デンマークの住居では、明るい色の木材がインテリアに用いられるようになり、また一部の住宅では、スライド式の壁が導入された。さらに装飾目的でない構造材、あるいは天井や壁の枠として、黒く塗装された木材が広く用いられるようになった。一部のデンマークの家具デザイナーは、19世紀とは異なるタイプのついで

たてを制作したが、部屋の分割用や、骨董や写真といったその時々好きな物を飾る壁など、さまざまなタイプが人気を博した。現代のついでには、さらにその立体的な質感によって、空間への視点的に動的な効果を加えている。1956年、家具デザイナーのポール・ケアホルム(Poul Kjaerholm)は、日本の波打つような柔軟な形を組み合わせて作品をデザインした。また機能主義のもうひとりの重要人物である織物作家のリス・アールマン(Lis Ahlmann)は、産業芸術博物館(Kunindustrimuseet)で、デザインミュージアム・デンマークが収集した布地のコレクションに日本の織物を見つけ、そこからインスピレーションを受けた。それゆえ、フーゴ・ハルベルスタット(Hugo Halbestadt)の収集による日本刀の鍔の膨大なコレクションが1940年に現在のデザインミュージアム・デンマークへと寄贈された際、その陳列台のデザイン

を担当したコーア・クリント(Kaare Klint)が、リス・アールマンに白羽の矢を立てたのは当然のことだった。一方でリス・アールマンは、歌麿の人物画の服装の中に自分が捜し求めてきた何かを見出した。歌麿による女性の世界の表現と、さまざまな色柄の着物は今でも魅力的である。莫座や畳なども和紙でつくられたランプとともに人気となった。この時期、伝統的なソファは多くの家庭から姿を消し、独立した椅子が取って代わった。また、北欧の住居では一般に床に座る習慣がないにもかかわらず、コーヒーテーブルの脚はそれまでよりずっと短くなった。壁に固定された長椅子と、補助用の持ち運び可能な椅子という組み合わせもまた、日本との類似点が見られる。禅仏教と関連する建築物は、装飾を排除した簡素な部屋や要素の非対称な配置によって無限の未完成を表現したからだ。日本の伝統建築や内装から

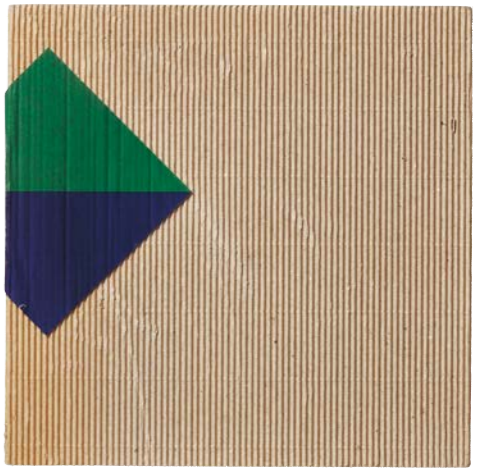


日本で衣類に使用されていた306もの綿織物のサンプル

18~19世紀
リス・アールマンは、日本で職人や農民たちが身につけていた衣類の生地を特に好み、自らの織物制作のヒントとした。
所蔵 / Kunindustrimuseet's Library
©Designmuseum Danmark



木版画
喜多川歌麿画
1790年代
歌麿の美人画に描かれた女性たちが身にまとう着物は、その美しい柄や色彩から、デンマークでも多くの作家を魅了してきた。
所蔵 / Kunindustrimuseet's Collection of Prints and Drawings
©Designmuseum Danmark



「Japan Fascination」展のカタログに施された
段ボール製のカバー

オレ・ゼフティング＝ラルセン作

1991年

装飾が排除されたグラフィカルなデザインに日本の影響が見られる。

所蔵 / Kunstindustrimuseum
©Designmuseum Danmark



日本食のための磁器の食器類とお盆

スノーレ・ステフェンセン (Snorre Stephensen) 作

作家自身のワークショップで制作 1984年

従来の日本の器をよりシンプルなものに革新したデザインは、新たなジャポニズムの出現として注目された。

所蔵 / Kunstindustrimuseum
©Designmuseum Danmark

受けたインスピレーションは、デンマークの家づくりに取り入れられ重要な要素となった。展示の写真からもそれをうかがうことができる。

日本の和紙でつくられたランプシェードは、デンマークにおいて長年愛用されていた。特に1960年代以降、レ・クリントやPHといったおなじみのデンマークの照明とシェアを争うようになり、建築家の選択肢としてだけでなく、一般向けに広まった。照明器具で知られるレ・クリント社の創業者にして建築家のP・V・イエンセン＝クリント (P. V. Jensen-Klint) が最初の紙製の折りたたみ式のランプシェードを制作したのは、1901年のことだった。接着剤を一切使わず、正方形の紙を幾何学的な形に折りたたむためのランプシェードは、日本の折り紙に学んだ技法だった。それはクリント一家の趣味として始まったが、次第にビジネスとして軌道に乗り、数多くのデンマークの建築家がこれまでにモデルのデザインに寄与したが、すべては同じ基本原理に基づ

番、襖の固定具といった金属製品にも及んだ。そのほか、展示で見ることが出来る紙や布地、様式化された花の紋様を描いた衣服などもペーターセンは持ち帰った。多くのデンマーク人と同様、彼もまた日本のデザインに魅了されたことを、その作品からうかがい知ることができる。実際、1963年以降の彼の署名は、日本の文字のようなデザインが使われている。ペーターセンは早くも1930年代には、コア・クリントの家具に取り付けられるキャビネットのメーカー、ルド・ラスムッセン社 (Rud. Rasmussens Snekkerier) のロゴを作るにあたり、明らかに日本から影響を受けたと分かるデザインを用いていた。

過去に学び、内と外の交流から 未来を見据える

展覧会では、日本とデンマークの同時代のデザインを並べて置くことで日本の芸術から学んできたことを示そうと試みた。日本の芸術からの影響は、自然から取り入れたモチーフに始まり、今日では制作手法や自然の素材に至るまで、簡素さを求めてやまないデンマークの応用美術とデザインとに大きな刺激を与えている。コペンハーゲンでは、ミュージアムの初代館長であったピエトロ・クローンが、こうした考え方に基づき木版画、籠や刀の鞘など、あらゆる種類の日本の品物の収集に尽力し、ミュージアムに生命を吹き込んだ。そして、こうした収集は続けられなければならないなかった。なぜならば、デンマークのジャポニズムがまだ軌道に乗っていない頃、動物や植物のモチーフがデンマークのデザインに取り入れられたジャポニズム第一波は、機能主義の直接的な影響によっていったん押さえ込まれたからだ。

いている。

グラフィックデザイナーのオレ・ゼフティング＝ラルセン (Ole Zotving-Larsen) は、1950年代末まで芸術工芸学校で閲覧することができた国際的な雑誌を見て、日本のグラフィックをじっくりと見たいと思っていた。当時、こう思ったのは彼だけではなかった。そして、彼が日本から学んだことは、いかに不要なものを除くかということだった。彼は正方形を基本となる形として用いてきた。彼が装丁した書物は正方形だが、表紙に描かれた日本の文字がコントラストや自然さ、ダイナミズムをもたらさし、本質的な形を崩すことができる。彼は言う。デンマークデザイン学校 (現・デンマーク王立芸術アカデミー) で教鞭をとった彼は、こうしたグラフィックデザインへの考え方を広め、多くの教え子たちが間接的に日本の影響を受けることになった。

1950年頃からそのカーブは再び上昇に転じる。展覧会の最後の展示室には著名なデザイナーによる家具、織物、漆器、陶磁器などの作品が並んでいる。そのなかには日本の工房で働いたことのあるデザイナーも数多くいる。助成金を得た陶芸家グッテ・エリクセン (Gutte Eriksen) は1970年と1973年の2度にわたって日本を訪れ、そこでバーナード・リーチに出会った。彼が皿やお碗、花瓶、ティーポットなどを自らの手によって造形したように、そこではその「生きた」関係が、釉薬を施す際に決定的なものとなることを教えられた。釉薬は限られた色彩、数多の陰影の中で揺れ動き、滴り落ちるのだ。1970年代半ばの4カ月間、リカール・マンツとボディル・マンツ夫妻 (Richard and Bodil Manz) は、二人の子どもを連れて、有田にある日本の伝統家屋で暮らした。有田で彼らはいくつかの工房を訪問したが、そのひとつに森正洋らの工房があった。そこで夫妻は、伝統的な手作業と機械を用いた加工を補助的に組み合わせ、作品を造形してゆく方法を目にした。また、個々の工房が特定のシンプルながら、装飾に集中して力を注ぐ点も彼らの目に留まった。20年後に再び有田を訪れたボディル・マンツは、いくつかの工房では、昔と変わらない伝統的方法で生産し続けていることを知った。滞在中、夫妻は有田での陶芸生産や彼らが滞在した工房に限らず、連絡をとった工房の日本人の仕事仲間の作品について膨大な情報を日記に綴っていた。夫妻はこうした工房でさまざまな技法や装飾を試みた。そして、製陶所に所属して制作する通常のデンマークの陶芸家のやり方ではなく、独立して作品を制作するという考えに確信を抱くようになった。

日本の実用品に魅了された デンマークのデザイナーたち

1963年、デザインミュージアムが開催した日本の家庭用品の大規模な展覧会では、日本の工芸や装飾芸術の伝統に連なる広汎な製品が集められた。この「現代の日本製品における伝統」展では、「ある国の伝統が現代の製品にいかんにかに利用されているか」を明らかにすることを目的とし、デンマークのデザインを振興しようという意図があった。デンマーク王立芸術アカデミーでデザインを教えるグンナー・ビルマン・ペーターセン (Gunnar Bihmann Petersen) 教授は、この企画展示への協力を求められた北欧のデザイナー集団に参加し、それが縁となって日本を訪れた。日本で彼が買い集めたさまざまな伝統的な実用品は、彼も書き記しているように、日本以外の国々でも日常的に使用できるものだった。この活動はデンマークに収蔵されることとなった。ペーターセンによるとその目的は、何百年もの歳月によって磨き上げられた伝統的な手工芸品を、いかにして新しい実用的な製品の生産へと結びつけるか、その実例を示すことにあった。ペーターセンを魅了したのは、例えば回転刃によって細かな溝が彫り込まれた木箱のように、加工の痕跡をも装飾的な要素として組み込む日本人の能力だった。彼の購入した品物は、実用的な漆器や竹籠等の竹製品のコレクションに加え、京都の桶、経木で編んだ籠やヤスリ、木筒の容器などがあり、さらにごく質素な焼き物の茶碗や急須、小刀や鋏、引き出しの取っ手、蝶

スウェーデンには「美しいものを日々の生活に」という標語があるが、それはまさに幾百年の歳月と高い美意識によって磨き上げられた日本の伝統工芸品に見られるもので、デンマークの人々を今も昔も魅了している。今日、日本はおそらくデンマークの工芸家やデザイナーが修業中に最も多く訪れる国だ。第二次世界大戦後、日本からの影響はあたかも波紋のように円を描いて広がり、師から弟子へと受け継がれた。現代のデンマークのデザイナーたちとの対話を通じて明らかになったのは、日本の芸術や作品からの影響が極めて広汎で、かつ高度に個人的なことだ。しかし全体として見ると、さまざまな集団からの意識的なアプローチが存在し、今日のビジュアルアートにおいてよく見られる議論や挑発によって生まれる作品ではなく、美的感覚に従った芸術を生み出したいという切実な願いと要望があった。こうした流れは近年、特に若い工芸家たちの間で広まりつつある。この分野へのより伝統的なアプローチとしては、素材に集中し、ごく限られた造形に対する工芸家個人による不断の研究という形をとることもあるが、これは日本の伝統的な芸術にも見られる。ジャポニズムは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、メディアの発達とともに利用できるようになった豊かなインスピレーション源のひとつの側面を構成している。展覧会では、ひとつの国の伝統がどのように変化し、他の国に取り入れられるかという過程を示している。今回の展覧会によって初めて、日本からの影響がどれほど大きく、多様なデザインの分野にその痕跡を残してきたかを知ることができるだろう。展覧会は成功を収め、開催期間は5回も延長され、2018年秋の終わりに頃までは展示が続けられる予定である。

企業の海外進出を成功させる ために本当に必要なこと

ローカル・マーケットに合わせきれるのが真のグローバル企業

インタビュー

株松井オフィス代表取締役社長、株良品計画前会長

松井忠三 Matsui Tadantsu

国内の市場が縮減するのに伴い、海外へ進出する企業が増えていますが、成功させているところは多くない。そうしたなか、株良品計画の「無印良品(MUJI)」は、海外出店を順調に進めている。成功の立役者である前会長の松井忠三氏に、実践から生み出された方法論を教えてください。

大山直美 構成／橋本裕貴 撮影／写真提供 株良品計画



スタートから11年間赤字だった海外事業

無印良品の海外店舗数は、474店舗(2018年2月現在 ※Cafe&Meal MUJIを含む)と今や国内店舗数を上回り、アジアを中心に、ヨーロッパ、アメリカ、中東など、27の国や地域に出店しています。国・地域の数では日本の小売業でいちばん多く、「なぜ無印良品は海外でもそんなにうまくいくのでしょうか」とよく聞かれます。

しかし、ここに至るまでの道は決して平坦ではありませんでした。私が社長に就任した2001年、良品計画は経営危機に陥っていました。その原因の一端は海外事業にありました。実は海外進出をスタートした1991年から11年間、ずっと赤字だったのです。

状況を考えると海外からの全面撤退もありえましたが、私はそれはもったいない、なんとかもう一度やれる方法はないかと考えました。というのも、なかには黒字の店もありましたし、すでに前社長のときに全面撤退していたアジアのお客さまからは「MUJIにもう一度出店してほしい」というカムバックコールのメールが相次いでいたからです。

また、実際に国内外の店舗をバタバタと閉め、フランスでは大幅な人員整理までしましたが、リストラだけでは企業は立ち直りません。苦しい状況であっても成長の芽を育てるための種まきは必要であり、勝てるパターンをつくり上げないとダメだと、次第に痛感するようになりました。

失敗の原因を徹底的に分析する

その後、なぜ赤字になるのか、その原因を必死になって分析しはじめました。

まず、すでに閉めていた1号店のロンドン店や2号店の香港店がうまくいかなかった理由は明確でした。前者は老舗のリバイティ百貨店、後者も百貨店のグループであるウィンオングループから声がかかって出店したのですが、パートナーと組んだことが失敗の原因です。自分と相手とは、考えていることも戦略も経営状態も違いますから、「同床異夢」ではうまくいきません。ここから学んだのは、オペレーションは自前でやるというこ

とです。

次に、だんだんわかってきたのは、売り上げに対する家賃比率の重要性です。たとえば、ロンドンの目抜き通りにある店は年間5億円以上もの売り上げがあるのに、家賃が非常に高く、売り上げに占める比率が19%近くに達していました。これではいくら繁盛しても黒字化はむずかしい。特にロンドン王室と貴族が土地と建物の大半を所有しており、彼らには相続税がないため、所有者はよほどのことがない限り変わりません。したがって、物件の供給は非常に少なく、契約期間も20年、25年といった強気の設定です。一方、物件を借りたいという需要は大変多く、家賃の水準はひたすら上がる一方です。

もうひとつ、罪つくりなのは不動産仲介業者の存在です。仲介業者はデベロッパーから預かった手持ちの物件を仲介することで手数料を取るの仕事ですから、持ち込み物件しか紹介してくれませんし、こちらの希望より家賃が高めの物件を勧めがちです。

こうした分析を経て、2004年12月、ミラノに初出店したときには、仲介業者は使わず、ロンドンとパリから自社の社員を長期出張させ、自分たちで物件を探して候補を3件ほどに絞り込んだうえで、家主と直接交渉しました。ひとつ目がダメでもまだふたつ手持ちがあれば、こちらも強気で交渉できるので、対等に戦えるからです。

同時に、ある裏技も使いました。一等地でも1



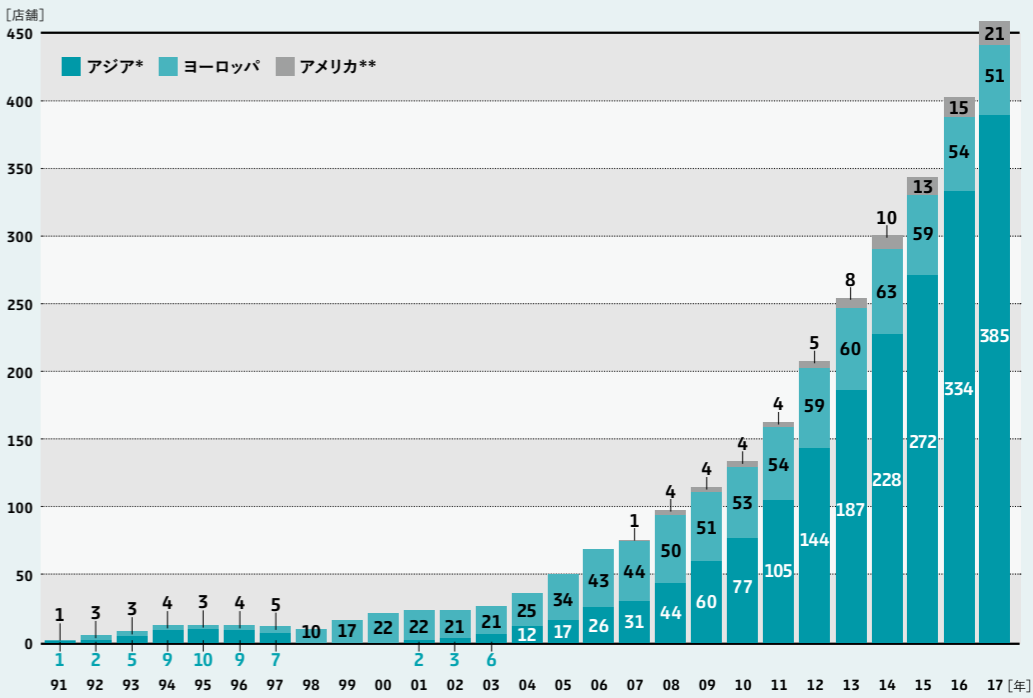
海外出店第1号は、1991年7月、イギリス・ロンドンの老舗「リバイティ百貨店」別館に展開。「無印良品」を欧米の人が発音しやすい「MUJI(無地に通じる)」としたのもここからだった。



2004年12月にオープンしたイタリア・ミラノ店では、ロンドン店や香港店などで失敗した経験が活かされた。

無印良品の海外総店舗数および出店・閉店数の推移

■図1：総店舗数



■図2：出店・閉店数

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	
ヨーロッパ	出店数	1	2	0	1	0	1	1	5	8	7	2	2	0	5	9	9	4	9	4	5	3	7	4	7	1	0	1
	閉店数	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	2	3	0	1	0	0	3	3	3	3	2	1	3	4	5	5	4
アジア*	出店数	1	1	3	4	3	1	0	0	0	0	2	1	3	6	6	9	6	14	16	19	31	42	50	47	45	66	61
	閉店数	0	0	0	0	2	2	2	7	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	2	3	1	5	6	1	4	10
アメリカ**	出店数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	1	3	2	3	2	6
	閉店数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

* アジアは中東、オセアニアを含む ** アメリカはカナダを含む ©2017. MATSUI office corporation All Rights Reserved.

階に比べて2階の方が家賃が安いので、同じビル
の1階と2階を借り、2階は1階より広い面積を
借りることで家賃を抑えるわけです。そうすれば、
2階に数多くのアイテムを並べられますから、無

印良品の世界観を伝えやすくなります。
こうした工夫を重ねながら、イタリアでは1年
に1店舗ぐらいをめどに、ゆっくり出店してい
きました。その結果、ミラノに出した5店舗はい

ムバックコールが強烈だった香港では、2001
年にいち早く再出店を果たし、順調に黒字を出し
ていったことが、その後のヨーロッパ進出への足
がかりになりました。

やはり、ここでも教訓がありました。どの店も
家賃比率を10%以下に抑えて、次々に出店しまし
たが、最も好調だった3号店の家賃が、3年後の
契約更新で、なんと3倍に跳ね上がったのです。
小分けにして貸した方が利益が高いと考えた家主
の、暗に出ていけという意思表示です。しかたな
く店を閉めて、また近くに出店し直しましたが、
アジアではヨーロッパとは反対に、契約期間をで
きるだけ長くしないと、更新のたびに家賃が上
がるリスクが高いことを学びました。

世界にグローバル・マーケットはない

こんなふうに、契約ひとつ取ってもヨーロッ
パとアジアでは事情がまったく違いますから、売
れる商品も国ごとに大きく異なります。

アメリカに初出店したときには、はたして資本
主義が行き着いたこの国でMUJIが受け入れ
られるのかと心配しましたが、意外なものがよく
売れました。たとえば、無印良品のスプーンや
フォークといったカトラリーは、アメリカの製品
に比べて小ぶりですが、小さくて品質がいいもの
がアメリカの市場にはなかったため、飛ぶように
売れたのです。

また、ヨーロッパではクリスマスの時期に、
ちょっとしたプレゼントを大量に買って贈るとい
う文化があります。その時期に最もよく売れるの
が、中にラップが入ったラップケースです。外箱
がこわれやすく、ラップもピタッとくっつかない

ヨーロッパの製品に比べると質がいいからです。
香港では、若い人たちが一種のファッションと
してMUJIの商品を買ってくれるため、食品
とステーションナリーが売れる比率が非常に高い
が特徴です。

無印良品には約7000もの商品があります
から、基本的には国ごとに商品を開発する必要は
なく、その商品群のなから各国に合った品揃え
をして対応していきます。ただし、中東のク
ウェートに進出した際には例外的にベッドを新た
に開発しました。クウェートの人々は500㎡
超の広大な家に住んでいるため、ベッドもキング
サイズでないと売れないからです。

よく「グローバル企業になるにはグローバルな
視点を持つことが大切だ」などと言われますが、
「世界にグローバル・マーケットはない。あるの
はローカル・マーケットだけだ」というのが私の
持論です。世界各国で、その土地に合わせたビジ
ネスができる企業こそ、グローバル企業といえる
のではないのでしょうか。

毎回、前もって現地の法律など、ある程度のリ
サーチはしますが、出店してみないとわからない
ことがほとんどで、常にトライ&エラーです。
特に、食品や化粧品、ベビー用品などは国ごと
に厳しい規制があるため、蓋を開けてみて初めてわ
かることが多々あります。

たとえば、オーストラリアに初出店したとき、
車内や機内で休むときに使うネッククッションを
発売したところ、カバーにファスナーが付いてい
ると子どもが誤って中身を口に入れる恐れがある
という理由で、即販売禁止になりました。他の国
ではまったく問題なかったため、思いも寄らない
ことでした。

れも1年で投資を回収するという劇的な成果をも
たらしたのです。

かくして、他のヨーロッパ諸国でも同様に、ブ
ランドの浸透と黒字化を図っていきました。

再出店後の成功の裏にも失敗があった

成功したヨーロッパの再出店でも、新たな失敗
を経験しました。

あるとき、ヨーロッパの店舗を視察すると、お
よそ無印良品とはいえない商品が並んでいます。
向こうで開発した衣料品です。そもそも欧米人と
日本人とは体型が違うため、体格が大きな人向
けの衣類が必要になり、当初は現地でデザイナー
を雇って開発を始まりました。しかし、無印良品を
ある程度理解してくれているデザイナーであって
も、次第に自分の個性を出したいと思ってしまう
その結果、フリルが付いた服やピンクの服などが
店頭に並びだしたというわけです。品質も日本の
製品より明らかに劣っていました。

生活雑貨でも同様のことが起こりました。キャ
ンプ用のシートや持ち運びできるコンロを現地で
企画して販売したところ、人気はあるものの、と
ても無印良品のクオリティには達していない商品
が出回ってしまったのです。

いずれも日本から部門のトップを送り込みまし
たが、個人の力ぐらいでは改まらず、やはり全体
のしくみを変えるしかないと感じました。以来、
商品企画は海外では行わず、日本で行うことを徹
底し、ようやく無印良品のコンセプトとクオリ
ティを保つことができるようになりました。

ヨーロッパと並行して、いったん撤退したアジ
アでも再進出を慎重に進めていきました。特にカ

このような経験から、現在、無印良品ではどの
国で売っても問題がないよう、各国の規制をすべ
てクリアする素材や仕様で商品をつくるようにし
ています。

日本の「引き算の美学」に通じる
ブランド力

無印良品が海外事業を通じて気づいたのは、企
業のグローバル化を成功させるには、以下の3つ
が不可欠だということです。

- ・ブランド
- ・ビジネスモデル
- ・オペレーション力(実行力)

ひとつ目の「ブランド」は日本語で言うところ、特
徴とか信用という言葉で置き換えられますが、こ
れがないと世界では戦えません。

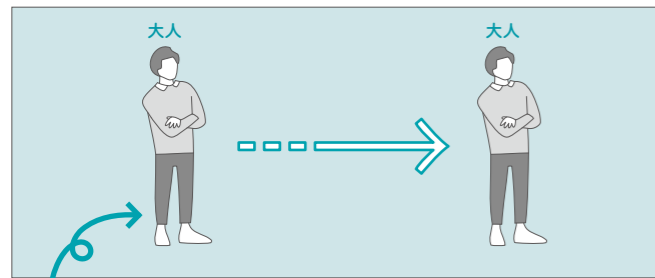
無印良品は、もともと良品計画の母体である西
友のプライベートブランドとして誕生したもので
す。高度成長期が終わって成熟時代に入ると、流
通各社はこれからはナショナルブランドだけを
売っていてもダメだと、こぞって独自のプライ
ベートブランドの開発に乗り出します。ところが、
1980年当時は一流メーカーが製造してくれ
なかったため、確かに3割安いですが、クオリティが
足りない。それでうまくいかなくなるわけです。

西友は少し遅れて開発に着手したため、品質や
機能を犠牲にするとダメだということに気づきま
す。そこで、品質を守りながら合理的に3割安く
する商品開発をして成功します。「わけあって、
安い」というのが当時のキャッチコピーでした。

他社が失敗したもうひとつの理由は、成熟時代
は消費者のニーズが細分化されていくと予想して、
アパレルを中心に細分化を進めたことです。20代

■図1：古代社会と近代社会の違いにともなう大人と子どもの関係性

古代社会（できあがった世界）



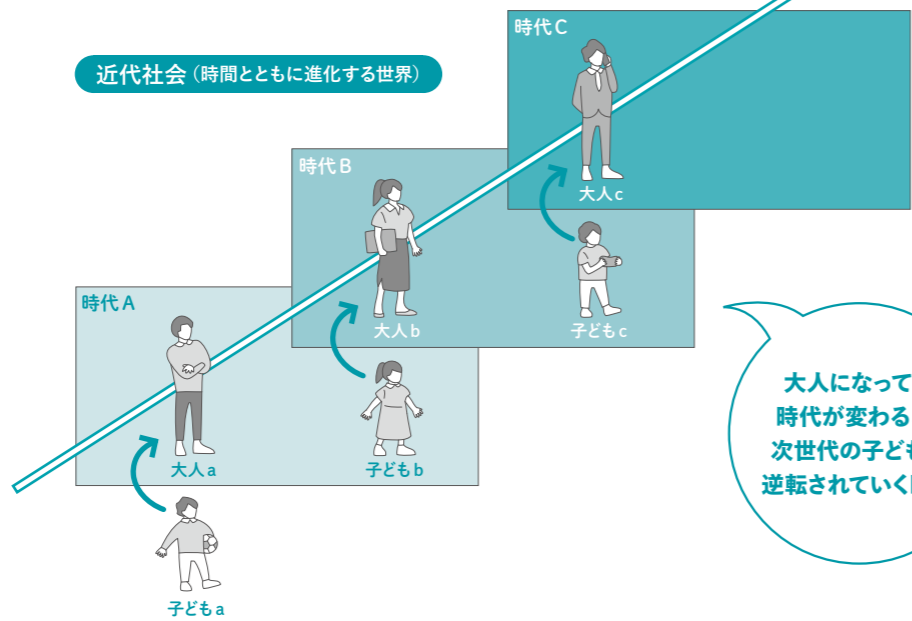
子ども

古代社会（上）では、子どもがいったん大人になれば、そのままその世界の中で大人として居続けることができた。しかし近代社会（右）においては、子どもがあるひとつの世界の中でいったん大人になっても、その人がその後まったく変化せずにいた場合、次世代の子どもたちとは同じ立ち位置となり、さらに逆転されてしまうことも考えられる。

※『大人になることのむずかしさ』（河合隼雄著、河合俊雄編、2014年、岩波現代文庫）47～48頁の図を参考に一部話者が加筆・修正したものを参考に作図

イラスト/野口理沙子（イスマデザイン）

近代社会（時間とともに進化する世界）



一度大人になると、ずっと大人でいられた時代

進歩!!

大人になっても時代が変わると、次世代の子どもに逆転されていく時代

「自分、または自分の働いている企業は何者なのか」ということまで、根こそぎ変わっていくような時代に私たちは生きています。変化することと学ぶことと、ずっと付き合っていくかざるを得ないのはそのためです。

特に、日本の企業の場合、ひとつの会社で長く働き続けるという雇用慣行が定着しています。これはどちらかというと、アメリカ型ではなくヨーロッパ型の社会に近いもので、組織の内部に労働市場があります。アメリカ型社会では外部に労働市場があるため、人は企業・組織から自由に入ることができます。企業の変化についていかなければ、人をリプレイス（置換）すればよいのです。一方、日本は内部に労働市場があるので、企業の組織や戦略、方向性が変われば、中の人も組織のそのズレに従い変わらなければなりません。変わることに絶対的に必要なため、そのための「学び」にもきっちり向き合っていかなければなりません。

企業や組織内での世代間ギャップについても、同じことが言えるかもしれません。たとえば、新しいITツールにすんなり馴染める人とそうではない人の世代間の溝が課題のひとつだ、という会社もあるでしょう。また、先日、ある老舗企業の課長さんが、「僕はもう43歳だからいまのままのやりかたでいいんだ」とおっしゃっていました。でも、考えてみたら、定年が70歳になった場合、彼には企業人生があと27年もあるのです。まだまだ先が長いのに、このままで逃げ切れるのでしょうか。

最近の私の体験ですが、社会人も含む大学院生中心の職場から、学部生をおもな対象にする職場に移ったところ、日常的に使う連絡手段のソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）



神谷真生＝構成／橋本裕貴＝撮影

いま働く大人に必要な学び

異質なものと「対話」を通じて外部と創造する学びの提案

インタビュー 立教大学経営学部教授 中原淳 Nakahara Jun

国内外を問わずますます多様化していく世の中において、企業のあり方とそこで働く人々の意識の変革も求められている。そのカギとなるのが、他者との「対話」を通し、新たな創造性につなげていく「学び」のスタイルだ。「人生100年時代」ともいわれるこれからの時代を生き抜くために、いま身につけておくべき「本當の学び方」を、企業の現場にも通曉する「大人の学び」のスペシャリスト中原淳氏に伺った。

なぜいま、大人が学び続けなければならないのか

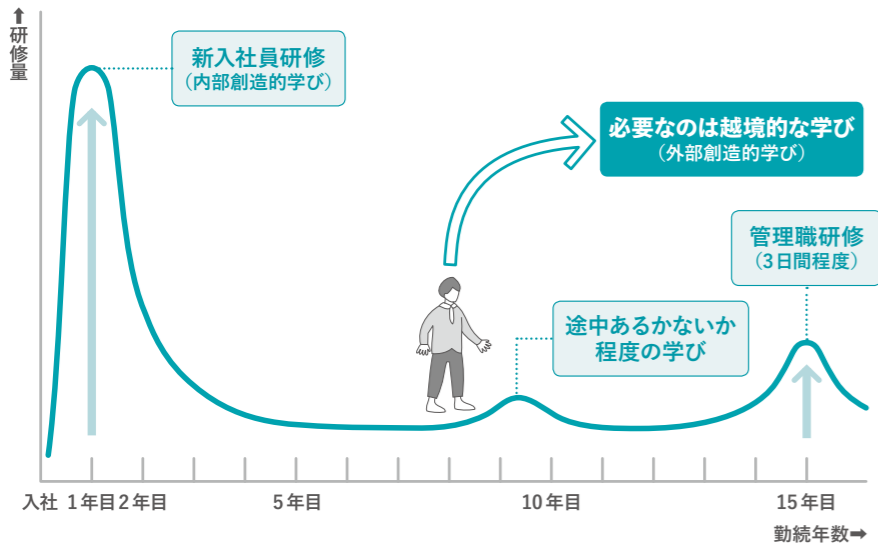
かつて、定年退職を迎える55歳から先は「余生」と言われました。それがいつのまにか、定年は60歳以降、さらに65歳となり、そして高齢者の定義も変わり、我々の社会は「定年レス」とも呼ぶべき世界に突入しつつあります。

こうした時代、人々は長い時間をかけて仕事人生を完走しなければならず、登山に例えれば、登山・下山・再登山を繰り返さねばならない人が増えることも予想されます。そのため、一度学生時代に何かを学び終えても、そのまま生き続けることは難しくなっています。大人になり社会に出た後にも何かを新たに学び、身につける、「大人の学び」ともいえるべき考え方が非常に重要になってきました。それは、いわゆる「資格取得」などではなく、私たちの仕事人生が非常に長期間化しているがゆえに必要なようになってきた学びです。

心理学者の河合隼雄氏の著書を参考に、社会の枠組みという面から考えてみたいと思います。図1のように、古代において社会の変化は非常にゆっくりとしたものだったため、人は人生においてあるひとつの「できあがった世界」にしか相對していませんでした。しかし、近代以降、人が一生に相對する世界が、時間とともに「枠」ごとに変化し進化するようになりました。つまり「社会が進歩する」ようになったのです。そして現在、この「枠の変化」が、きわめて速くなっているといえます。

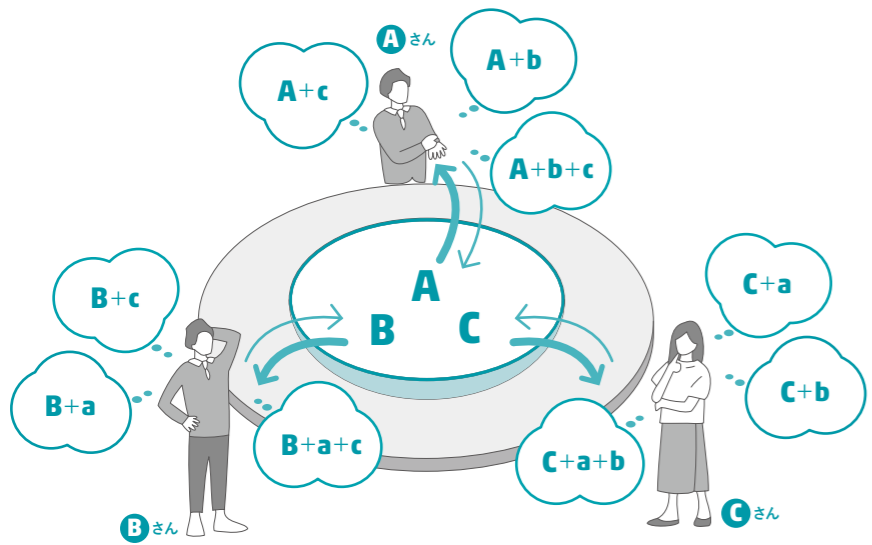
これを現代の企業に置き換えてみます。数年前まで、自動車メーカーは自動車をつくる会社として大いに機能していましたが、いまや時代を担うドメイン（事業領域）は自動車ではなく「モビリティ

■図2：日本企業における研修への投資イメージ



新入社員研修の後、実務担当者期に研修らしい研修はほとんどないに等しい。入社から15年ほど経ち、管理職になるタイミングで3日間程度の研修があることも多いが、完全な「初期重視型」。日本企業における学びというと、ほとんど新入社員研修を指すと言ってもよい。
イラスト/野口理沙子 (イスマデザイン)

■図3：対話型コミュニケーションの概念図



たとえば三人三様の考えを持つA、B、Cが、それぞれの考えを同じ場に落とす。それはa、b、cという考え方として自分以外のふたりにも認められ、さらに「a+b」「a+c」「b+c」「a+b+c」といった検討プロセスを経て、最終的にAでもBでもCでもない新しいものを生み出す。
イラスト/野口理沙子 (イスマデザイン)

が世代によって異なるために、学生たちとのコミュニケーションがとりにくくなりました。いろいろと考えた末、私が新たなツールを使ってみることで、学生たちとのやりとりがうまく進むようになりまし。これを単純に「(新旧世代の)どちらが変わるべきか」という議論にしたくはありませんが、最初は変わる勇気が必要でも、新しいものを適応的に学んでいく方が、この先長い仕事人生において、自分にとっては楽なのではないかと思っただけです。

日本の企業における学びの実態と課題

日本の企業における学びとしては、一般的には次の3つが挙げられます。

- ・新入社員研修
- ・OJT (On-the-job Training)
- ・自己啓発

このうち、新入社員研修やOJTは、企業が提供する学びの場であり、「企業の中で組織人として適応し、企業の中で成果を出していく」ことを目的としたものです。

いま、新人の離職率の増加なども問題になっているので、組織への適応も大事な課題ですが、日本の企業で長らく置き去りにされてきているのは、「適応のための学び」ではなく、「創造のための学び」だと言えます。

日本企業における人材開発は、図2が示すように、新入社員研修に多額の投資をするパターンがほとんどです。しかし、実務担当者となり、何らかの新しい事業をつくり出す必要が生じた際などに本当に必要なのは、社外にもいろいろなものがあるということを見つめ、そこから創造へと

つなぐことを可能にする学びです。新人時代の内部での学びではなく、外部に出て創造性を見出す「越境的な学び」が、きわめて大事になってくるのです。しかし、日本の企業においてはそれが大変不足しています。

先ほど自動車メーカーの例を挙げましたが、ここ数年、企業が自社の活動範囲を明示する、いわばドメインとしてどんな事業を行っていくのか、あるいは自社そのものが何者であるのかといった企業意識が非常に揺れています。それと呼応するように、私の研究室に求められる経営者からのご相談に、顕著にみられるようになった問題があります。それは、入社2年から10年目くらいの実務担当者、それも仕事のできる人から続々と会社を辞めていく、いわゆる「2年目問題」「3年目問題」で、ここ1、2年非常に増えているようです。

おそらく、その原因は、企業そのものが揺れている時代に、彼らも不安でしかたがないからでしょう。実務担当者になり、外の世界と接したとき、ふと、「自分はそのままこの企業にいても大丈夫なのか？ 他所にはもっと何かあるんじゃないか？」といった不安を持ち始める。これも、内部適応のためだけではなく、外部との接触のなかで創造性を見出すための越境的な学びを、企業としても意識していく必要がありますようになってきていることの顕れではないでしょうか。

外部⇨他者とのやりとりを創造的な学びにつなげる「対話」とは

外部で創造性を獲得するための、越境的な学びのスキルを培うには、自分自身と外部、すなわち「異質なもの」とのつながりをどこかにつくっていくしか方法はありません。

15年ほど前から「日本は対話(Dialogue)のない社会だ」ということが言われています。「対話」とは「異質なものの違和感のあるものをいったん認めるコミュニケーション」です。

たとえば図3のように、話し合いの場においては、それぞれの価値前提を確認し、選択肢を吟味すること、言い換えれば、「互いの持つ違和感を交換すること」でもあります。しかし、この行為は非常に面倒なものでもあるため、日本では、そんなことをするより、最初から同じ考え方を持つ人だけで集まった方が楽だと考える人も多くなりがちかもしれません。また、「時間と場を共有し親睦を深める」ための「雑談」や、「いくつかの選択肢について論を戦わせ、どれが正しいかをその場で決める」ための「議論」は得意でも、異質なものを受容する対話型コミュニケーションは苦手という人も多いのではないのでしょうか。

しかし、会社、業種、さらには国を超えて、これから他者と一緒に新しいものをつくっていく、というときには、違和感や異質なものと向き合い、その中から「AでもBでもCでもない」ものをつくっていくことが、非常に重要になるはずですが、10年ほど前の著書で、「日本の組織の中で起こっているほとんどの問題は、対話の不足に起因している」と書きました「*1」。当時とくらべていまは、多少は対話的な場が増えてはいるようですが、まだまだ足りていない印象です。

「越境する学び」を実践する

対話型のコミュニケーションを促進し、越境するための学びの場として、具体的にどのような形があり得るでしょうか。いくつか私が関わってきた

た事例を紹介したいと思います。

●社会人のための学びの場「ラーニングバー」

2004年にアメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)に留学しました。そのとき、MITやハーバード大学、ケンブリッジ大学の強さとは、教授のすばらしさや学生の優秀さもさることながら、「いろいろな国からいろいろな人たちが来てぶつかり合っている」ことなのだと思ってきました。それともうひとつ、集まっている人たちが「私は世の中を変えてやる」と本気で思っていることです。そういう人たちが侃々諤々の議論を交わしているところが、日本とははつきり違ったのです。また、現地では「Brown Bag Meeting[*2]」というスタイルの研究会有り、食事をしながら話し、互いに学び合い、その場で「じゃあ何か新しいことを一緒にやろう」という流れになることもしばしばありました。

ぜひこうしたことを日本の大学でも実施したいと、帰国後の2006年から3年にわたって、「ラーニングバー」という、働く大人を対象にしたワークショップ、研究会を開催しました。最初は10人くらいの規模で始めたのですが、耳の早い、いわゆる「アーリーアダプター」や「イノベーター」と呼ばれる人たちが学外からも参加するようになり、そのうち彼らが人を連れてくる形でどんどん大きくなり、最終的には800人もの応募が集まりました。やはりこうした場のニーズはあったのでしょう。

運営上は、大人が仕事を終えて午後6時から集まる場としていくつかの工夫をこらしました。まず、主催者側で飲食物を用意し、参加者はそれを手に交流を深めます。「モチベーションとは？



「ラーニングバー」では、バーと名がつくとおりお酒や料理も用意されている。そのリラックスした雰囲気の中、講演を聞くだけでなく、さまざまなイベントも工夫しトータルの学びが行われた。

リーダーシップとは何か？」といったことをテーマに、人材育成の専門家、医師、教員、アーティストなど、毎回さまざまなバックグラウンドを持つ人が講師としてプレゼンを行います。そして、そのプレゼンを30分ごとに区切って挟まれるバートタイムや「対話」のための時間に、参加者は互いに意見交換をします。こうして、ただ講演を聞いて帰るのではなく、「聞く↓考える↓対話する↓気づく」という一連のプロセスを体験していただける場にしたのです。

●異業種企業でのリーダーシップ研修

いま、さまざまな業界において、異業種が融合して新しいものをつくり出していくことが大いに求められています。

しかし、たとえばものづくりや技術の世界でも、エネルギーやインフラ関係では相当な安定性が求

このように、異質な人たちが集まったとき、「対話」を通して初期におけるチーム・アップがうまくできていれば、関係の質がよくなり、それが成果にもつながりやすいのです。一方で、「みんな違ってみんないい」的な、文化相対主義的方向に陥って、きちんと対話を行わずになんとなく事を進めていると、結果として「(A+B+C+D)÷4」の割り算で導き出される、誰にも刺さらないものをつくり出したり、または「根拠なき多数決」で決めてしまったりということになります。

私の関わっているリーダーシップ研修の参加者には、優秀でありつつも、それまでに失敗も重ねてきていて、さらに研修でも同じ失敗を繰り返して、フィードバックタイムのとき、「いやあ、いつも言われていたことなんですよ」と言う方もいらっしゃいます。そうした方に、「いま、あなたはラーニングの対象だけど、45歳を超えてもい



企業5社が集まり、各社混成の5名で構成された6つのチームによる若手社員向け異業種コラボレーション研修。北海道美瑛町民を前に、地域課題解決のためのプレゼンテーション発表イベントも開催された。

められ、開発のスパンも長い。一方で、IT業界などは開発のサイクルが非常に短い。仮にそういう異業種同士が融合して新しい展開を見せるには、開発のサイクルや体制そのものから見直さなければなりません。

こうした状況を踏まえ、私は、異業種企業がコラボレーションする形での、リーダーシップ研修の監修やファシリテーションをしばしば行っています。

4年ほど前の例ですが、飲料や電機メーカーといった比較的厚長大系の企業と、ITや広告関連などフットワークが軽めな企業5社が合同で6つのチームを結成し、農家の後継者不足やさまざまな地域課題を抱えた北海道・美瑛町の課題を解決するための策を考え、提案し、採用されるまでを競う形で研修を行いました。ここで非常にもしろかったのは、たとえば

まのままだと、リプレイスの対象になりますよ」とお話しすることもあります。厳しい言葉ですが、自分のやりかただけに固執した結果、置換される前に、いまのうちにしっかり学んでおいた方がよいのでは、と思うからです。

●試行錯誤を通じて学ぶリーダーシップと対話型コミュニケーション

優秀な学生が企業に入ってからリーダーに据えられている場合など、それぞれが「What」と「How」の主張をしあってかみ合わないパターンが顕著にみられます。リーダーは頭も切れるし自分の手も動くが、人がついてこない。優秀なだけに、部下やメンバーはこう考えるに違いないという思い込みが強かったりするので。そのため、対話型のコミュニケーションとリーダーシップを、ぜひ学生のうちに学んでおいてほしいと思います。現在、私たちは立教大学で、そのためのチームワークトレーニングを「立教リーダーシップ・プログラム」として実施しています。

「対話する↓決める↓ものを生み出す↓評価する」という一連のサイクルは、実際に経験して学ぶしかありません。このプログラムも、提携企業から課題をもらってそれを解決する、いわゆる「ビジネスコンテスト」形式で学生にそのプロセスを体験させます。

こうしたコンテストで、思いつきのアイデア勝負で勝ってしまうチームは何も学ばません。いったん負けて、チーム・アップのしかたがまずかったのか、みんなのリーダーシップ行動がよくなかったのかと振り返り、負けた理由を考えてみるのが大事なのです。これを何度も繰り返し、次につなげていく。もちろん会社に入ってから

「施策」という言葉ひとつでも、抱いているイメージが各社でまったく違っていったということ。重厚長大系の会社の人たちは、5年、10年とかけて開発していくことを施策と考えます。もう一方の会社の人たちは、施策とは「やってみて考えればいい」ということだと思っています。

このように、同じ言葉でも会社が変われば異なる意味になりますが、研修の場では、グループごとにそのイメージを何かに決めねばなりません。そのとき、対話型のコミュニケーションができ、それぞれの異なる考え方を話し合い、それぞれの頭に入れたうえで、最終的にひとつに決めるのと、最初から何かに決めてしまっただけかかるとは、研修の最終成果に大きな違いが出ます。最初にきちんとした対話の時を持たなかったグループは、必ずどこかでうまくいかなくなります。

極端に言えば、研修初日の彼らの過ごし方を見ていけば、最終的にどのグループがうまくいくか90%以上の確率でわかってしまいます。初日に、あらかじめ用意されたいろいろな食材を使って、チームごとに1時間でランチをつくって食べて片付けまでしてもらおうという、かなり無茶な課題があるのですが、役割分担までしておきながら時間内に食べられなかったチームや、各人が別々のものをつくりはじめてしまうチームも出ます。この課題によって、「What」目標、「How」役割分担・関係調整」を、最初にきちんと決めなければならなかったことを彼らは学びます。この「What」と「How」がリーダーシップの要素であると私は考えていますが、研修中にこれと同じような経験・失敗を繰り返していくうちに、課題設定をする際のハードルの高さの決め方などが、だんだんとわかってくるようになります。

必要なことですが、企業では、何度も失敗するというリスクがとれないかもしれません。教育機関は試行錯誤ができる場所なので、これを大學生、または高校生のうちから始めて、大いに転んでいてほしいと思っています。

とりわけ、ここ5年ほど好景気と言われるなか、先のことをあまり切実に考えていない人が多いのは、とても危険だと思います。海外にどんどん出て学ぶ最先端の人と、完全に学習を放棄してしまいう人の格差も激しくなっています。10年後は、企業もスリム化するでしょうし、ポストもどんどん限られてきて、いまの学生たちにとっては、おそらく働き出してからが本当のサバイバルになることが予測されるのです。中長期的に考えれば、まさにいまこそ対策を考えねばならないときであり、学生のうちに対話型コミュニケーションとリーダーシップを学ぶことで、社会人になってからの「越境する学び」の素地を身につけてもらいたいと考えます。社会人には、すぐにでも「越境する学び」を実践していただきたいと思います。

注 *1 『ダイアログ 対話する組織』(中原淳・長岡健、2009年、ダイヤモンド社)

*2 「ランチ(茶色い紙袋・brown bag)に入ったサンドイッチ等」持参のミーティング」が転じて、食事をしながらのミーティングの意。実際には主催者側で食事が用意されることも多い。



なかはら・じゅん

1975年、北海道生まれ。東京大学教育学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科、米田・マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学准教授等を経て、今年4月より現職。立教大学経営学部のリーダーシップ研究所副所長、ビジネス・リーダーシップ・プログラムの主任。専門は経営学、組織行動論。著書に『職場学習論』『経営学習論』『働く大人のための「学び」の教科書』、共著に『事業を創る人』の大研究「リフレクティブ・マネジャー」など。

過去・現在・未来を貫いて、 知の共同化の回路を地域・社会に組み込む — 大阪・上町台地境界での実践から

弘本由香里
Hiromoto Yukari

社会の枠組みが変化し、さまざまな問題が集積するなか、持続可能な未来へとつなぐにはどうすればよいか。過去からの歴史が理め込まれ、社会をつくる基盤である地域に着目し、問題に応える学びのあり方がどのようなものか、大阪・上町台地でのトライアル「U-COROプロジェクト」の実践をもとに探る。

はじめに

— 地域から社会の枠組みの変化に向き合う

日々の暮らしをとりまく社会の枠組みが、劇的に変化している。個人も組織も地域も、その渦中で、ある者は進む方向を見失い、ある者は立ち止まって思索し、ある者は変化に向き合い新たな枠組みづくりを模索している。そこで、未来を左右する最も重要なファクターは何かといえば、地域をつくりなおす土壌を耕す、地域に根ざした横断的な学びの仕組みがあるかどうかである。

かつて高度経済成長を実現した時代は、直線的で均質な発展を是とし、学びの形式も上から下へ、一方向の知の授受だった。しかし、今求められているのは、内と外、自己と他者が、相互に影響し合いながら、再帰的な軌跡をたどって成長していく、循環型の学びのモデルだ(図1)。

学術研究の分野はもちろんのこと、行政やビジネスをはじめ実践分野でも、新たな学びの方法論が求められている。たとえば「質的研究」というアプローチが、改めて関心を集めている。その理由については、『新版質的研究入門——人間の科学』のための方法論[*1]では次のように説明されている。

私たちが生きる世界の多元化が進んでいる。その中で既存の考え方や理論がますます通用しなくなっている。複雑さを増す社会のさまざまな関係性をときほぐす上で、質的研究に特別の意義が出てくるのである。(中略)

ポストモダニズムの唱導者たちは、大きなナラティブ(物語/語り)と理論の時代はもはや終わったと宣言した。その代わりに、さまざまな限定付きのナラティブこそ必要だというわけである。なぜなら人間に関わる事象は、それが

ひろもと・ゆかり
1961年生まれ。住宅建築専門誌「新住宅」編集員等を経て、1992年から大阪ガス(株)エネルギー文化研究所(CEL)客員研究員、2010年から同特任研究員。「上町台地合昔タイムズ」の発行をはじめ、生活・文化の視点から都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』(創元社)、「地域を活かすつながりのデザイン——大阪・上町台地の現場から」(創元社)など。

起こる地域、時間、状況といった特殊な影響を強く受けるからである。

グローバル化や情報化や個人化等の流れそのものを止めることはできない。しかし、そこから生じるさまざまなリスクは克服していかなければならない。新たな問題解決の現場では、一方向の理論は通用しない。むしろ、個別でローカルな時間・空間の文脈や出来事や分野や立場を超えた人々の関係性のなかにこそ、持続可能な未来を切り拓いていくための手がかりがある。答えはひとつではなく、変化する状況に応じて、柔軟に修正をかけていくことができる学びのあり方こそ注目に値する。

こうした見取り図を持ち、なぜ今、地域というフレームが重視されているのか、なぜそこで、学びという営みが重視されるのか、互いに問いなおすまなざしを得ることによって、足元に広がる地

域は、新たな問題解決と価値創造の沃野へと変わっていくはずだ。

知の共同化が求められる時代

— フィールド・トライアルへ

社会の最前線で試されている研究手法のひとつに「アクシヨナリサーチ」がある。社会的課題の解決を目的とし、課題に関わるステークホルダーと研究者が協働し、相互に影響し合いながら、解決への創造的な力を発揮していくというアプローチである。研究者の側から捉えると、文理が融合した社会技術の実装化のための方法論としての意義が強調される。しかし、これを地域というフィールドの側から捉えなおしてみると、アクシヨナリサーチが起動するための回路が埋め込まれた地域の基盤のあり様こそ重要ではないかという論点が浮かび上がってくる。ここで問われる地域の基盤とは、前述の再帰的な学びと問題解決のあり方を築く基盤。「知の共同化」の回路と言い換えてもよいだろう。

グローバル化や情報化のドライブは、かつて容易につながり得なかったものをつなぎ、自由と便益の拡大と裏腹に、個々の生活や地域・社会をいともたやすく容赦なく揺るがす、予測が困難なリスクを現出させている。同時に、階層格差が広がり、成長社会の規範を支えてきた中間層が弱体化し、二極化が加速する。世代を超えた貧困の連鎖は、階層間の憎悪に結びつきやすく、社会の不安定化につながっている。

異文化・階層の衝突やコミュニケーションの断絶・孤立を防ぎ、格差を緩和し、ウェルビーイングを実現していくために、人と人、人とまちの交わりを豊かにするコミュニティ・デザインのあり

方が切実に求められていることはいうまでもない。だが、もっとも肝心なことは、地域における新たな問題解決と価値創造の基盤となる、知の共同化の回路をいかに日常のなかに組み込むかだ。

そこで鍵となるのは、まず目の前にある地域の様相を、関係性が生み出すダイナミズムとして感受すること。その際、過去・現在・未来を貫いて地域を俯瞰する視点を設けることによって、異なる世代や多様なルート、新旧住民や地域内外から立場や分野を横断する、参加と協働のルートを開くことである。

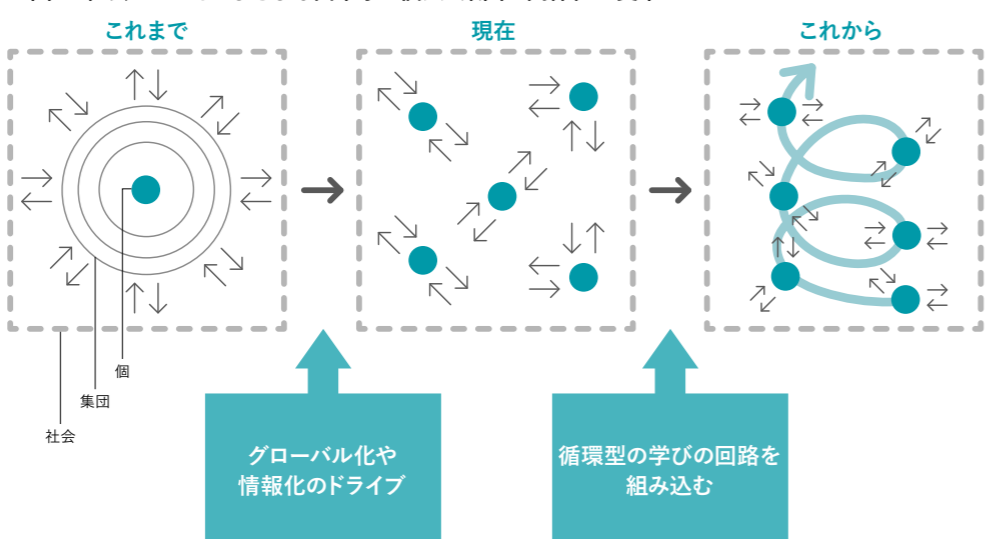
こうした問題意識のもと、筆者はCELにおける、コミュニティ・デザイン研究の一環として、大阪・上町台地境界でフィールド・トライアルを重ねてきた。実践のデザインにおいて、現在・過去・未来を貫くインタラフェイスとなり、異なる者の関係性を起動する可能性を持つ、地域資源(地域の特性を物語る、自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習など)の役割に注目した。知の共同化の回路を地域に組み込む方法論を模索して、CELが地域の方々と緩やかに連携し、具体的なトライアルを展開してきたのが、「U-COROプロジェクト」[*2]である。

多様性と再帰性のフィールド

— 上町台地が持つ意味

知の共同化を射程に集約的な記憶や創造的規範の共有を可能にしていくための、コミュニケーション・ツールや場のあり方について試行を重ねたU-COROプロジェクト。第1ステップ、第2ステップの取り組みの概要を紹介する前に、フィールドとしての上町台地境界が持つ意味について簡単にふれておきたい。

■図1：社会に生じるさまざまな出来事と個人・集団の関係性の変革



グローバル化や情報化のドライブ

循環型の学びの回路を組み込む

上町台地は、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である(図2・図3)。大阪城付近を北端に、大阪市内中心部を南北に貫く洪積台地で、古くは海の中に突き出した半島状の陸地だった。地政学的に内外を結ぶ政治・経済の拠点として、古代には四天王寺や難波宮が、中世から近世にかけては本願寺や大坂城、寺町が築かれるなど、日

■図6：今昔タイムズ 第6号



かな自然と雄大な景観」では、都市と農村の機能分担と濃密なネットワークによって成り立っていた近世・近代のコスモロジーを、当時の行楽地・景勝地の位置をたどりながら明らかにした。

第3号「なじみ・行きつけ・御用達 百貨店・商店街との思い出から垣間見る 暮らしとつながりの変化」では、まちなかの百貨店・商店街も、人と人、人と地域の文化をつなぐ場であったことを、まちなか暮らしと買い物にまつわる数々の証言から描き出した。

第4号「文画人・堤権次郎が見つめた大阪 上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶」では、大正から昭和初期にかけて、豊かな田園風景が住宅と工場が建ち並ぶまちへと変貌を遂げていった「大正」時代、その記録に努めた権次郎の作品世界にスポットを当て、人口減少期に入っ

た都市の未来にまなぎしを向けた。

第5号「思い出の映画館と身近なまちの戦前・戦後」では、「大正」時代、空前の市街地開発と賑わいの前線で、暮らしのすぐそばに、欠かせない娯楽の場・映画館が開かれていった様子に迫った。身近なまちの映画館の盛衰をたどり、埋もれていた資料を掘り起こし、戦前・戦後の失われた地域の生活史に光を当てた。

第6号「昔も今もなにわ名物『玉造黒門越瓜』物語」(図6)では、2002年に玉造の地に戻ってきた、なにわの伝統野菜・玉造黒門越瓜の縁起をさかのぼり、豊臣期大坂から徳川期大坂への政権交代による土地利用の変化や、奈良・伊勢への出入り口に位置する地の利が生んだドラマに迫り、食と暮らしの関係性の今後を展望した。

第7号「伝説の生玉人形とたどる ものづくり

と文化の原風景」(図7)では、上町台地で今につながるものづくりの源流から、芸能とものづくりの申し子ともいえるべき「生玉人形」をはじめ、郷土玩具の数々を生んだ風土に、創造都市・大阪の原風景と将来像を重ねた。

第8号「有為転変、世情によりそい願いを映しよみがえるお地藏さんとまちの暮らしの縁起」では、お地藏さんの習俗・文化をたどり、幾多の時代の荒波を被りながらよみがえり続ける姿を追い、コミュニティのレジリエンスを担保する知恵に迫った。

第9号「はじまりは上町台地 “知” を運ぶ本のまち・大阪の軌跡をたどる」では、古代・世界に開かれた最先端の“知”の港に始まり、近世・近代には時代に先駆けた“知”の開拓者や媒体を生み出したまち・大阪を振り返り、その原

■図5：U-CoRoプロジェクト第2ステップの組み立て

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
1	「上町台地 今昔タイムズ」の発行(年2回)を通じた、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続					
2	「上町台地 今昔フォーラム」の開催(年2回)を通じた、ネットワーク形成と情報共有の場づくり					
3	「上町台地 今昔フォーラム ドキュメント」の発行(年2回)を通じた、資料・証言・知見の記録と社会へのフィードバック					
4	毎年4～8月にかけて、玉造黒門越瓜の、栽培・料理の持ち寄り・交流・「しろうりnews」を介した、地域住民から専門家まで、多様な立場・分野のネットワーク形成と情報共有					



上町台地 今昔フォーラム 第8回



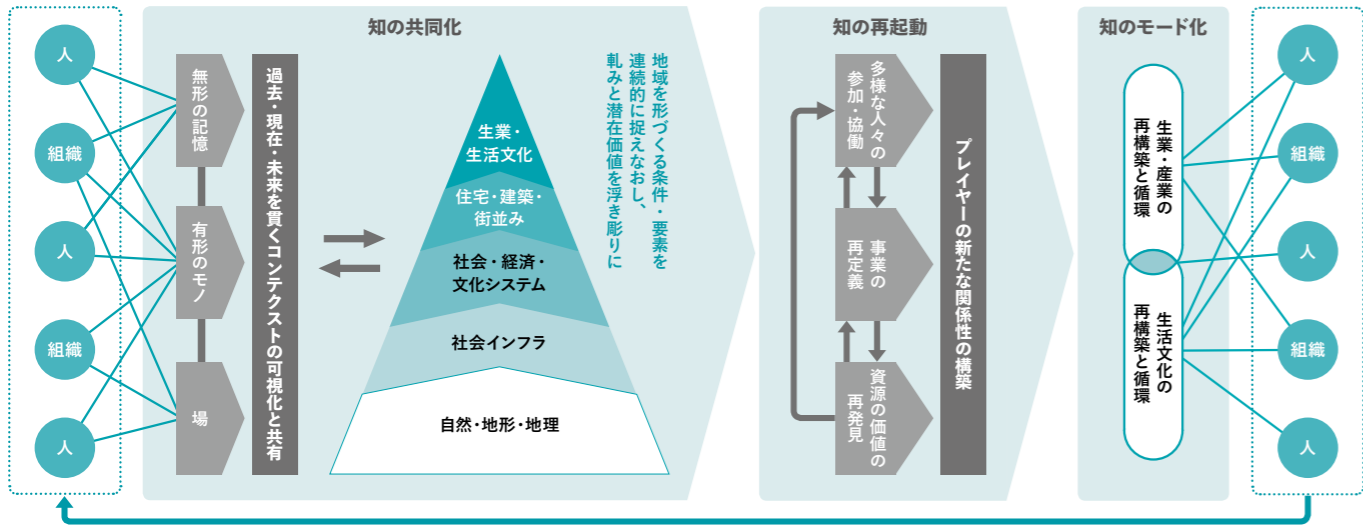
いる。①「上町台地 今昔タイムズ」による、過去・現在・未来、暮らし(記憶・体験)と歴史資料の接続、②「上町台地 今昔フォーラム」による、市民の知と専門家の知の水平な接続と視点・論点・情報共有の場づくり、③「上町台地 今昔フォーラムドキュメント」による、資料・証言・知見の記録と社会へのフィードバック、④地野菜・玉造黒門越瓜「ツルつなぎ」プロジェクトによる、しろうりの栽培としろうり料理の集いを通じた生活文化の醸成と、分野や立場を横断する共感の土壌づくり。①③は相互補完的な関係性によって知の共同化の幅を広げ、④は①③の苗床のような役割を果たしている。①④が連動することによって、地域住民(新旧)、地域活動団体(地縁型・テーマ型)、地域商業者・企業、社寺、学校・幼稚園、研究者・専門家、メディア、博物館・図書館、行政、他地域住民、他地域活動団体等、多様な属性と背景を持つプレイヤーが対等に出会い交わる関係性が担保されている(図5)。

「上町台地 今昔タイムズ」第1号(2013年秋・冬号)から第10号(2018年春・夏号)で、可視化したコンテキストを俯瞰的にぎゅっと眺めてみよう。

第1号「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」では、近代の鉄道網の発達とともに、急激に進んだ都市の拡大が、地域をどう変えていったのかに迫った。マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験知として共有することをめざした。

第2号「浪花の町衆が親しんできた 近郊の豊

■図8：知の共同化の方法論=地域をつくりなおすメカニズム



そこから望むべき未来へ、それぞれのまなざしの軌跡を描いてみる。知の共同化の回路によって意識の階層移動を可能にするプロセスが、大きな社会変革の力を秘めていることがわかる。

おわりに

知の共同化の回路を地域・社会に組み込む

社会の枠組みの変化とともに、再帰的な学びと問題解決のあり方が必要とされているという、大きな見取り図を携えて、多様性と再帰性の履歴をふんだんに宿した沃野・上町台地に分け入り、U・CoRoプロジェクトの歩みをたどって、知の共同化の回路を探ってきた。

第1ステップでめざした、多様性の獲得と共有は、自らと地域への再帰的な問いと実践を誘発し、第2ステップでの過去・現在・未来を貫くコンテクストの共有へのまなざしを開いた。そこで浮き彫りになった新たな視座が、まちの姿・暮らしの形を成り立たせている要素の関係性の再認識と、再構築の必要性。さらに、変革のエネルギーとなる、意識の階層移動のベクトルの重要性である。

紙幅の都合で詳述はできないが、プロジェクトに参加した方々の連鎖的な動きや意識の変化のなかに、知の共同化の回路がもたらす効果を読み取ることができる。たとえば、大阪くらしの今昔館のボランティア（町家衆）の方々による、生玉人形をはじめとする郷土玩具再生の取り組みの立ち上がり。地域の人口構造の偏在が進むなかで、新旧住民の結節点となる地蔵盆を維持するための知恵のシェア、フリーライドから一歩踏み出したという若い世代の意思表示。伝統野菜・玉造黒門越瓜の栽培と料理を媒介して、農業の実践者と食や建築のビジネスの担い手、子どもの成長の支援か

を支える要素を連続的に捉えることによって、関係性の軌みを見出し、潜在している新たな価値を引き出し、関係のあり方を組み立てなおしていくことを意味する。多様なプレイヤーの参加と協働を重視することもまた、これらの要素を連続的に捉えることによって、関係性を健全化・活性化していくことに通じる。

また、関係するプレイヤーの多様性とともに、プレイヤーの関心と意識のベクトル、方向性と量（動き）を持つエネルギーに注意を払う必要がある。「過去」―「未来」を横軸として、縦軸に「共」―「私」、「ポジティブ」―「ネガティブ」、「リアル」―「バーチャル」といった軸を設定してみよう。多様なプレイヤーが、現在立っている位置、過去に生きていたプレイヤーたちが立っていた位置、未来のプレイヤーたちが立つかもしれない位置、見出されていく(図8)。

地域・社会を構成するあらゆるセクターに、この方法論は適用できる。多元化が加速する社会にあって、切実に求められているシステムの転換に活かしていきたい。

注

*1『新版質的研究入門―(人間の科学)のための方法論』(ウヴェ・フリック著、小田博志監訳、2011年、春秋社、13・14頁)。
 *2 U・CoRoプロジェクト(第1ステップおよび第2ステップ)は、大阪ガス㈱エネルギー文化研究所が主催し、U・CoRoプロジェクト・ワーキンググループが企画・編集に当たっている。プロジェクトの詳細、発行物等はホームページで公開している。
<http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>
 *3『続大阪平野発達史』(梶山彦太郎、市原実、1985年、古文物学研究会)の資料ほかをもとに作成
 *4 U・CoRoウィンドウ・エキシビジョン06で制作した立体模型。土地の起伏を強調して表現している。
 *5 岡田憲夫氏が『地域(マチ)復興のためのゼロからの挑戦と実践システム理論』ひとりから始める事起こし(のすめ)―鳥取県智頭(ちず)町30年の地域経営モデル(2015年、関西学院大学出版会)42頁で、「五層モデルに見立てた「生きた地域」の複層基盤の構造」として示している。「基(第一)層 自然環境」「第二層 社会環境」「第三層 社会基盤」「第四層 建築空間・土地利用」「第五(最上)層 生活・活動」を参考にしている。

■図7：今昔タイムズ 第7号



点・上町台地からこれからのあり姿を問うている。第10号「稀代のなにわ名所案内 暁鐘成と再びめぐる上町台地 食が結ぶ高低・聖俗交わりの風土」では、幕末・大坂の博覧強記の絵師・戯作者「暁鐘成」のまなざしを通して、人と風土、人と人が交わるモードとしての「食」(名物・名所)と都市の関係性を読み解き、今、改めて都市が必要とする機能を掘り起こす機会とした。

新たな視座とベクトル

―地域・社会の構造を貫く―

コンテクストの可視化を積み重ねていくことによって、認識を新たにした視座がある。地域・社会を形成していく過程で、当然のことでありながら、今や日常生活のなかでも、まちづくりのなかでも、ビジネスのなかでも、意識の外に置かれて

しまっているポイントである。

地域・社会を形づくっている要素、たとえば「自然・地形・地理」、「社会インフラ」、「社会・経済・文化システム」、「住宅・建築・街並み」、「生業・生活文化」「*5」。これらの条件や営みが関係し合うことによって、まちの姿・暮らしの形が生み出されている。問題なのは、高度成長期を支えた社会システムによって、これらの関係性が分断され、覆い隠され、関係性の再構築が喫緊の課題であるにもかかわらず、そのことに気づくことさえ困難な状況に慣らされ、社会の構造転換がもたらすリスクにさらされていることだ。

「上町台地 今昔タイムズ」が可視化したコンテクストは、結果としていずれも断絶した関係性の再構築を志向している。過去・現在・未来を貫くということは、突き詰めれば、これら地域の営み

また、関係するプレイヤーの多様性とともに、プレイヤーの関心と意識のベクトル、方向性と量(動き)を持つエネルギーに注意を払う必要がある。「過去」―「未来」を横軸として、縦軸に「共」―「私」、「ポジティブ」―「ネガティブ」、「リアル」―「バーチャル」といった軸を設定してみよう。多様なプレイヤーが、現在立っている位置、過去に生きていたプレイヤーたちが立っていた位置、未来のプレイヤーたちが立つかもしれない位置、見出されていく(図8)。

地域・社会を構成するあらゆるセクターに、この方法論は適用できる。多元化が加速する社会にあって、切実に求められているシステムの転換に活かしていきたい。

多様・多層的な知へ挑戦する 新しい学びの場の創造

「ナレッジキャピタル大学校」体験報告

2日間限りの開催、講義総数なんと112コマ！
そんな「学びの祭典」が4月18〜19日に大阪で開かれた。
その名も「ナレッジキャピタル大学校」。
「学校や社会の枠組みを超えた新しい学びの場」づくりを目的として行われたこの大学校には、「ルネッセ」に関わる人々も多く講師として登場。
これまでにないスタイルで行われた学びのイベントをレポートする。

「ナレッジキャピタル大学校」の仕事掛け人は、異業種の人々が自由に交流しながら知的創造を行える場として2013年にグランフロント大阪内の中核施設として誕生した、「ナレッジキャピタル」。その活動については本誌113号でも紹介しているが、今年で5周年を迎え、大阪発民間運営による知的創造拠点として定着した感がある。

5年の間に、中核となる「ナレッジサロン」をはじめ「ナレッジイノベーションアワード」など多彩な活動を通じた知の集積は、ナレッジキャピタルの輪郭を厚く、豊かにしてきた。そうした知の財産を生かし、2日間限りのトライアルイベントとして行われたのが「ナレッジキャピタル大学校」だ。

「ナレッジキャピタル大学校」だ。トライアルと聞くとは、小規模な試みというイメージを抱くかもしれないが、蓋を開けてみれば大がかりな「学びの場」がつけられていた。

知の集積が可能にした、真の学び

大学校のメインテーマは「真の学びは『イマジネーション』」。イマジネーションは、フランス語の「想像する」を意味する言葉 (imagine) からの造語だ。中心となるのは1コマ20〜30人を定員とした100コマ超の無料講義。プログラムは「イノベーション」「科学技術」「メディア・エンターテインメント」「ベンチャー」「宇宙」「文化・歴史」「ライフスタイル」。

「大阪・関西」の8分野にわたる「知性とは何か——AI時代に空海の意義を考える」「セミは、ナッツ味!?——昆虫食の魅力とは」といった、好奇心をくすぐる講義タイトルが並ぶ。技術も歴史も音楽もアートも食もAIも宇宙も生物も……。知のごった煮のようなプログラムは、「面白そう！ 何が起ころのだろう？」という期待感を煽る。

講師は大学教授、起業家、美術館長、子育て研究者、宇宙科学者、料理家、ジャーナリスト、発明家といった多彩な「専門家」がとどめるが、いずれもこれまでナレッジキャピタルの活動に関わった人々だ。100コマ超の講義を担う人材が揃っているところにも、5年にわた

る分野の枠を超えた幅広い「知の集積」を見ることができるとするナレッジキャピタルらしい、想像力をかきたてる大学校は、受講受付開始と同時に、大半の講義が満席となったという。

刺激的な「学び」の格闘競技

会場は、グランフロント大阪地下のコンプレックスベンションセンター。広いフロア内に足を踏み入れると、出迎えたのは高さ7m、青と赤の宇宙鳳凰Phoeco (フェッコ) 。CGアーティスト河口洋一郎氏作による極彩色の巨大鳳凰は、このイベントのシンボリック存在だ。天井に



上/三方に壁のないオープンな教室「寺子屋みたいな教室」で、池永寛明所長による講義に熱心に聞き入る受講者。
下/会場内でも圧倒的な存在感を放つ宇宙鳳凰Phoeco (フェッコ)

届かんばかりの鳳凰に圧倒されながら前を見ると、いくつものビルケースを積み上げた上に、板を載せた大きな長方形のテーブルをつけたスペースが目にとまった。立て看板には「立ち飲み屋っぽい教室」と書かれていて。その名前の通り、椅子がなく、壁や仕切りもない。まさに立ち飲み屋のように、ふらっと立ち寄りそうな雰囲気のある教室である。隣には、「寺子屋みたいな教室」と名付けられた別の教室があった。正面の壁に「わいがや塾」の額が掛かり、床を畳敷きとしている。ここも正面以外は壁がない。さながらテ

レビドラマのオープンセットのようだ。聞けば、今回の「教室」はいずれも「すべての壁を取り払う」をコンセプトにつくられたという。壁のない教室内に靴を脱いであがり、長机を前に座って講義を受けるところは、まさに寺子屋の風情。ここが「ルネッセ」講師陣による講義の場となる。扁額に書かれた「わいがや塾」は、ナレッジサロン内の異業種交流塾「ワイガヤ塾」からとっており、先に掲げた8分野のうち「大阪・関西」部門の講義はこのワイガヤ塾の監修である。

ほかにも、講師の足元にLEDパネルがある「宇宙船か!?教室」など、形態も名称も一筋縄ではいかない「教室」が計10カ所。2日間に各教室で10コマ、計100コマの講義が広いワンフロアの会場で行われる。どの教室も、定員で中に入れずとも外からの立ち見は自由というスタイルである。

初日、評論家の寺島実郎氏による基調講演で開校の後、いよいよ100コマを超える講義が開始した。「寺子屋みたいな教室」での1時間限目は、ワイガヤ塾塾長でもある大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所池永寛明所長による「『天下の台所』大坂から大阪の成功と失敗の本質はなにか——『大阪を問いなおす』(前編)」。

懐かしいチャイム音が鳴ると同時に、10の教室から一斉にマイクを持った講師の声が流れた。壁がないという事は、各教室から出る音がダイレクトに響くということである。その音量は喧騒と言ってもいいほどで、まるで講義という名の格闘競技が始まったようだ。ところが、そんなふうな周囲の音に「自分」の意識が「講義を聴く」方向へと切り替わっていく。同時に行われている10コマの講義の空気が伝わることに刺激となり、受け身で「講義を聴く」姿勢から能動的に学ぼうとする意識に切り替わるのだ。これは受講者側のことだけでなく、講師側も同じではないだろうか。次第に池永所長の話し方にも熱がこもっていったように感じられ、静かとは言えない状況のなか、講師・受講者双方が意識的に集中することで学びの空間がつくりあげられていくような一体感が、そこにはあった。

そこからは講義時間50分はあっという間だった。聞き終わった後、スポーツを終えたような爽快感があった。1コマ50分という時間配分は講師としては話し足りない、聴く側ももう少し深く聴きたい……というところだが、それが「もっと学びたい」意欲に自然とつながる。今回想われた100コマ超の講義は、新

たな学びを自ら見つけ出すためのイントロダクションの役割も果たしたのではないだろうか。

「ルネッセ」塾が伝えるもの① 過去から未来へ

「寺子屋みたいな教室」を中心に行われた「ルネッセ」講師陣による講義の内容は、大きく「①大阪・近畿の昔から今日、明日」と「②歴史と技術」というカテゴリーに分けられ

る。①に分類される池永所長の講義は、天下の台所といわれた大坂、「大坂」と言われた時代を経て、現代の大坂は地盤沈下しているとい

われるが、それを言っているのは実は大阪人であるという提起に始まった。さまざまな例をあげながら、日本的な「文化」や「学びたいから学ぶ」という知的欲求が高い風土は今に残っていると、先人は今の我々に「自らを学びなはれ」「多くと交わり、自らを見つけないはれ」「大い

なるワンパターンに、小さな革新を加えなはれ」と語りかけている、とまとめた。

池永所長の講義の受講者はスーツに身を包んだサラリーマン風の男性が多く見られた。受講者は教室によってさまざまだが、学生からシルバードまで老若男女幅広く参加しており、平日午後の開催ながら、サラリーマンと思われる層も多く見られた。ビジネスの中心地でもあるグランフロント大阪が会場であるとい

う立地も幸いしたのかもしれない。

同じく①にあたる講義としては、谷直樹大阪くらしの今昔館館長による「大坂城と船場が輝いていた時代」と現代を問う、加藤政洋立命館大学教授による「《キタ》と《ミナミ》を文化の地理学から問う」、橋爪節也大阪大学総合学術博物館教授の「大坂と大阪万博があったころの大坂の空気」、そして日本料理かこみ店主梶山一希氏「天下の台所大坂をつくった大坂料理と出汁文

化」から現代の食を問う」等があげられる。

谷氏は、大阪の人が大坂城をどう考えているかを起点に、江戸期の大工頭中井家に伝わるふたつの大坂城指図などを読み解きながら、当時の大坂が商業都市であったことにより育まれた教育機能や町内におけるコミュニケーションの成熟について解説し、フィールドワークを通じた都市研究を専門とする加藤氏は、花街研究者加藤藤吉撮影による大阪の写真を象

徴的に掲げながら、「キタ」と「ミナミ」の文化的背景について説明、現在空洞化しているといわれる大阪だが、今も文化の力がある、と話した。

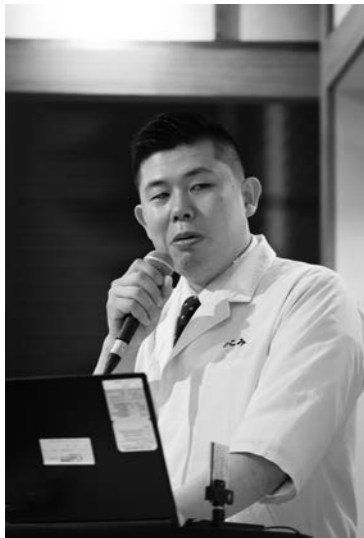
また橋爪氏は、自身の目で見た大阪万博の記憶を土台に、当時の大阪の空気感、現在の評価などについて語りながら大阪万博の特殊性などを解説した。

講義中に行われた「三都出汁比較」だ。前半の大坂の食や出汁文化についての歴史的な講義に続き、大坂・京都・江戸の地の水を使って、それぞれの料理法でとった出汁を飲み比べるという趣向だが、出汁の香り、風味が三都でこれほど違うとは、と驚かされた。香り高く、一口目からさらりと美味しさを感じさせる京都、飲み続けるうちにだんだんうまみが沁みて奥行きを感じさせる大坂、鯉の濃さが前面に感じられる江戸……出汁の味がそのまま三都の印象につながるどころが面白い。

いずれの講義も長年の研究、経験をもとにした歴史的知見を披露するにとどまらず、それを現代の我々がどう捉え、咀嚼し、考えていくべきかという導きを示されており、講義後に、受講者の関心はより高まったのではないだろうか。

「ルネッセ」塾が伝えるもの② 歴史と技術の融合

カテゴリーの「②歴史と技術」にあたるのは、保田充彦氏による「可視化」の歴史と可能性——グラフからバーチャルリアリティまでである。保田氏が代表をつとめる(株)ズームスの理念は「サイエンスとアートを融合して、役立つコンテンツをつくる」こと。その経験から「可視化」



上/大阪万博をどう見るかは、その当時の万博とどう関わってきたかで全く異なると語った橋爪節也氏。
下左、右中/梶山一希氏による「三都出汁比較」は、水もそれぞれの土地から汲んだものを用いるという本格的な「比較」となった。
右下/「大阪が一番美味しい」「香りは京都の方が……」、それぞれの違いを楽しむ受講者。



上/制作年代の異なる大坂城指図を見せながら講義する谷直樹氏。
下/加藤政洋氏の講義では、写真のほか大阪の町を描いた小説や随想などとりあげながら、キタとミナミの当時の姿を解説した。



上/可視化について、多彩な実例をあげて解説する保田充彦氏。
下/雪丸ロボットを手に、その誕生のエピソード等を説明する北浦武士氏。

について、その歴史や「わかりやすく伝える」意義や手法等を説明し、実際の作例として、自身が手掛けた360度VR（バーチャルリアリティ）動画による河内寺廃寺跡復元を紹介した。これは、今は跡地が公園として整備されている東大阪市の河内寺廃寺の講堂や金堂などを復元した3DCGを、スマートフォン上で見られるようにしたもの。実際の跡地に立ってスマートフォンをかざすと、画面上に復元した建物が現れ、往時の姿を目で見ることが出来る。建物内に入って中を見ることが出来る。VRの本質は「経験を保存し、

伝えること」にあると保田氏は語る。「ルネッセ」が提唱する「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現代、未来へつなぐ」その実践のひとつが、先述のカテゴリー①にあたる「過去から掘り起こしてつなぐ」方法だとすれば、保田氏の講義は、「現代技術をもって歴史を現代に融合させ、つなぐ」ということになろうか。同様の例としてあげられるのが、「歴史から未来へ——聖徳太子の愛犬・雪丸と歩む」だ。この講義は周りを本で囲んだ「図書のある教室」で行われた。講師は、平井康之奈良県王寺町町長と、ソフトウェア・WEBアプリケーションの開発を手掛ける

（株）ミッドウェアソフトウェアデザイナーズ代表の北浦武士氏。さらに王寺町にある達磨寺の日野周圭住職も加わった。王寺町には、古刹達磨寺の略記に記録が残る聖徳太子の愛犬をモチーフとしたイメージマスコット「雪丸」があり、もつと多くの人にその存在を知ってもらいたいという平井町長の依頼を受け誕生したのが、雪丸ロボット（ナレッジキャピタル主催「ナレッジイノベーションアワード」受賞）と、雪丸ロボットを使った、子どもたちだけで運用できる図書館システムである。雪丸が人語を解し経緯を読んだというエピソードから、AIを搭載したコミュニケーションロボットとして開発された雪丸は、話しかけに対してかわいいう声で「またきてくれてありがとう」などと言葉を返してくれる。王寺町では、雪丸ロボットを図書館窓口を導入以降、子どもが図書貸出率が上がるなど成果が上がっているそうだが、それは「雪丸」の姿によるところが大きいと北浦氏は語る。「まず、単純に見た目が可愛らしい。しかもそれが、聖徳太子の愛犬という歴史的な意味合いもあり、インパクトがあります」という言葉通り、地元王寺町で親しまれた「雪丸」のもつ由緒正しさ、先端技術がかみ合った好例である。

大阪の「学び」の源流
イベント会場内外には、講義以外にも「新しい学びの場」としてさまざまな仕掛けがめぐらされていた。ひとつは、ナレッジキャピタルが進められているプロジェクトなどを実際に体験できる「学び×遊び」エデュインメントミュージアム」。次世代型飛び出す絵本、見回りロボットなどのほか、先述の保田氏が開発したバーチャルドローン（ナレッジイノベーションアワード受賞）体験のブースがあり、ご本人に指導していただきながら体験してみた。実際の操作が難しいドローンのバーチャル練習にも有効というバーチャルドローンは、VRゴーグルを装着しコントローラーで操作する。ゴーグルを通した視界に沿って仮想のドローンを会場内に飛ばすのは楽しいが、難しい。バーチャルと現実の融合——言葉のみの知識を実感として身の内に落とし込めた、と感じた。もうひとつ、会場前に誰もが一度は足を止める大きな「箱」があった。脇に大きく「ナレッジキャピタル発想の源流」と書かれており、正面に穴がいくつか空けられている。穴を覗くと、何やら人の映像が動き、喋っている。その声は「木村兼葎堂と申します」……。江戸期の文人木

村兼葎堂が自己紹介をし、その隣の穴からは同時代の学問所懐徳堂の解説が流れる。古くからあるしかけ絵本とデジタル技術を組み合わせ、3D体験ができる「のぞきからくり」を使った、「ルネッセ」でもおなじみともいえる、木村兼葎堂や懐徳堂の紹介である。なぜ、それが「ナレッジキャピタル発想の源流」となるのだろうか。

このナレッジキャピタル大学校を
開催するにあたり、まずはナレッジキャピタルがどんなことをしているかを知ってもらうためのコンテンツとして、のぞきからくりを企画しました」と話すのは、大学校全体のアートディレクションをつとめた、（株）スーパーフェスティバルの山本粧子氏だ。ナレッジキャピタル始動の際に、「懐徳堂から発想を得た」と趣旨を説明していたことから懐徳堂を、さらに池永所長を通して知った

木村兼葎堂もナレッジキャピタルの目指すものと同じであるということから、それぞれ「源流」としてとりあげたという。江戸期から現代まで、大阪の学びの文化は地続きであるということをも、この「のぞきからくり」は語っている。

多様かつ多層的な挑戦が感じられたナレッジキャピタル大学校。トライアルゆえに課題も生まれたことと思われるが、それも含め、この「新しい学びの場」が今後どう進化し続いていくか……。学び、刺激を受け、互いに触発されることで、時代を動かす新しい知が生み出されてきた。自由に交流し、知的創造を行える、このような学びの場から次に何が生まれるか、楽しみである。



上・中/保田充彦氏によるVRを活用した試みの体験ブース。絵本とVRを組み合わせた次世代型飛び出す絵本とバーチャルドローン体験。
下/「のぞきからくり」の企画者山本粧子氏。「人間は想像できるから面白い」という発想からメインテーマ「真の学びは“イマジネ!”」を提案。「勉強、教育はもっとハッピーでないと」と、テーマカラーを華やかなピンク色にしたのも山本氏である。

自然の物語に導かれて

文 中上紀
Nakagami Nori

画 浅妻健司

亡父の故郷が和歌山であるため、子供の頃から彼の地の海や川、山などの自然に親しんできた。いま、自然から生まれた伝説や伝承に、心を寄せている。

例えば、日高町の「道成寺」に伝わる二つの伝説。一つは、藤原宮子の物語。一説に彼女はかつて海女の娘で、なぜか髪が生えなかったという。だがある時母親が海の中から光り輝く観音像を拾い上げて以来、髪が伸びはじめ、ついに身の丈よりも長くなった。やがて旅の途中の文武天皇に見初められ、藤原不比等の養女となって入内に至ったという「髪長姫」の伝説が信じられている。もう一つの伝説は、有名な「安珍清姫」だ。清姫が大蛇と化し、安珍を追いかける情念の強さは恐ろしいほどである。両方の伝説の舞台となる紀州の自然、川や海も、決して平たんではなく、激しい。そして美しい。強い女性そのものである。

さて、清姫は恋の炎で安珍を焼き殺したが、火といえば、新宮の御燈祭りが思い出される。新宮は、亡父の生まれ育った町である。年に何度か、家族全員引き連れて、新宮の祖父母の家にいき、長々と滞在するのが常だった。2月6日の御燈祭りに、父が幼い弟を伴って上った時のことも覚えている。

のように流れていくので、新宮では昔から、山は火の滝下り龍、とうたわれてきた。この祭りによって、あらゆるものをそぎ落とし、人々は再び生まれ、新しい年を生きていく。

さて、子供の頃、新宮で不思議に思っていた場所に、浮島の森がある。

街中に、異色な空気を醸し出すようにぼつんと在る浮島の森は、足を踏み入れるとずぶりと沈んでしまう心もとない地面によって湖に浮かぶように構成されている島である。暖かい地方と寒い地方の植物が混在する珍しい生態系があったり、洪水の時も沈まず浮かんでいたりと、現在も多分に謎めいている場所だが、かつては両親から一人で近づいてはならないと、たびたび脅された。

浮島には、貧しい少女が弁当の箸を忘れて木を手折った罪で、大蛇に穴に引き込まれたという伝説がある。たしかに、夜ともなれば、大蛇のみならず様々な魍魎が潜んでいそうなほど鬱蒼と暗い。また、浮島の奥には、終戦の頃まで遊郭があったという。島の不思議と、女性たちの悲哀が、いつしか伝説を作り出したのかもしれないとも思う。

那智勝浦町の那智湾に面した集合住宅に父が仕事場を定めたのは、私が9歳か10歳の頃である。以来、和歌山に来る時の家族の拠点はそこになる。

那智山は熊野三山の一つであり、那智の滝をこ神体にしたたく那智大社がある。那智湾には、那智の滝が川となって注ぎ込んでいる。この海には、

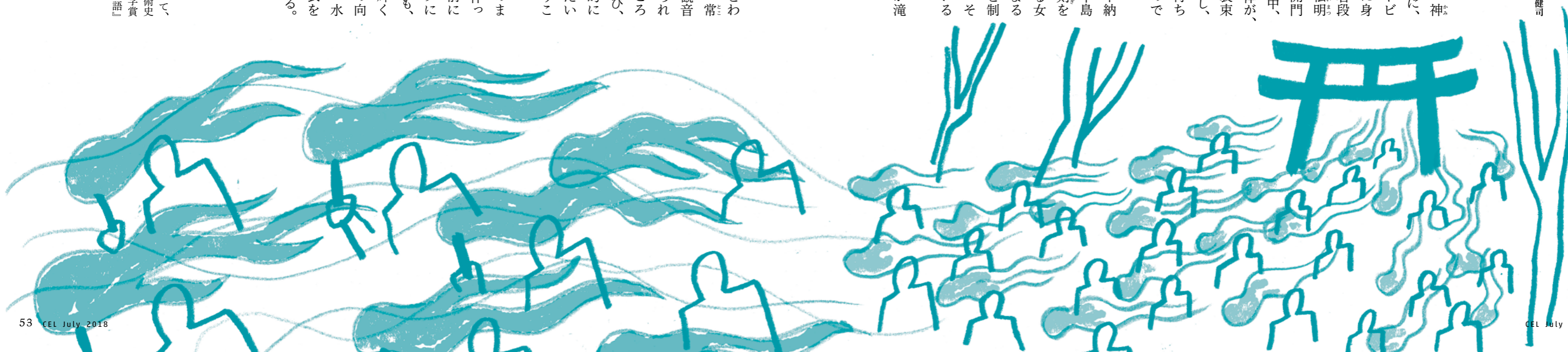
1400年続く御燈祭りの舞台となるのは、神倉神社が祀られている神倉山だ。この山の中腹に、カエルが伏せたような形に見えることからゴトビキ岩と呼ばれる岩がある。祭りの日、白装束に身を包んだ2000人も男性が、538段の石段を上り、この岩の周りに集まる。皆、手には松明を持っており、そこにご神火をいただいて、開門の合図とともに、山を駆け下りる。祭りの期間中、山は女人禁制だ。山の神様は女で、この祭り自体が男女の契りだからである。ただ、女たちは白装束を纏った男たちの食事や振る舞い酒の準備をし、さらには、山から下りてくる男たちを、麓で待ち受ける。男と女、双方がいて成り立つ祭りなのである。

ところで、祭りでは、古来の鍛冶職が鉞を奉納する。これは神武天皇が地形の荒々しい紀伊半島に分け入り、高倉下命の援助により布都御魂剣を手に入れ、大熊あるいは毒気を吐いて抵抗する女酋長「ニシキトベ」を倒したとされる伝説によるものだ。神倉山で、男神は鉄を以て母系社会を制することで、男系中央集権社会の祖を築いた。そのバランスのために鉄の源である火を祀っているとも映る。

遠くから見ると、神倉山の肌を、松明の火が滝昔、補陀落渡海という行があった。僧が自らをわずかな食料や水と一緒に小さな船に閉じ込め、常世の国を目指して船出するという行である。観音菩薩の浄土が、水平線の向こうにあると信じられていた。平安時代にはじまり、江戸時代中期ごろまで、何人も僧が渡海した。渡海して生き延び、琉球にたどり着いた僧もいると聞くが、基本的に死と背中合わせの旅である。それでも船出したいと思わせるほど、神々しく雄大な自然だということだろう。

現在も、我が家の那智の部屋は、ほぼ当時のまま残されている。時折私も、家族の誰かしらを伴って滞在するが、ここに来ると、なぜか夜明け前に目覚めてしまう。空が白み始めた頃、ベランダに出て、海を眺める。朝日が昇り始めると、海面も、後ろの空も、燃えるような色になる。赤々と輝く紀伊の海には、魔術的な力を感じる。水平線の向こうへ行った者ですら現れてくる気さえする。水平線の反対側には、那智山が聳え、滝が白い衣を纏った女性のように艶めかしい光を放っている。そこから、物語の声が聞こえる気がする。

ながみ・のり 作家の中上健次、紀和鏡の長女として、1971年東京都に生まれる。ハワイ大学美術学部美術史科卒業。1999年、『彼女のプレнка』ですばる文学賞受賞。主な著書に『いつか物語になるまで』『熊野物語』『天狗の回路』など。



外に学び、つくり直すための10冊

未来へつなぐ社会をつくるために、日本の内に留まらず、外に出て、学び、
既存の方法をつくり直すことが問われています。
今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。



6 『質的イノベーション時代の思考力』 ——科学技術と社会をつなぐデザインとは』

モノがあふれている現代社会では、「量的イノベーション」から「質的イノベーション」への方向転換が求められている。著者は、そのために必要な「デザイン力」は、従来の「問題解決」型ではなく、「構成的デザイン」であることを、豊富な事例をもとに明らかにする。昨今注目される「デザイン力」とは何かを問い直す好著。

田浦俊春=著
勁草書房/2018年



7 『なぜイタリアの村は美しく元気なのか』 ——市民のスロー志向に応えた農村の選択』

歴史あるイタリアの美食文化を将来につなげていくには、努力も必要だ。60年代以降のアグリツーリズム、スローフードとスローシティ運動、農村景観の保全と世界文化遺産登録が、美しく元気な村をつくりあげているという。農民が主体の活動と景観・歴史文化の保全が、経済開発に必要な不可欠と捉えた一連の活動は、日本にも参考になる。

宗田好史=著
学芸出版社/2012年



8 『世界で最もクリエイティブな国デンマークに学ぶ 発想力の鍛え方』

世界一のレストランとして注目を集め、北欧料理の概念を刷新した「ノーマ」は、なぜデンマークで誕生したのか？ その仕掛け人を筆頭に、世界でも人気のLEGO、ロイヤルコペンハーゲンなどの事例から、第一線で活躍するデンマークの人々に焦点を当て、そのクリエイティビティの秘密に迫る。
クリスチャン・ステューディル、リーネ・タンゴー=著
関根光宏、山田英二=訳
クロスメディア・パブリッシング/2014年



9 『物語 オランダの歴史』 ——大航海時代から「寛容」国家の現代まで』

政治、経済、文化から日本との交流まで、オランダ史を専門とする著者の研究成果が1冊に。オランダの底力は、大航海時代の歴史だけで語り尽くされるものではない。数々の戦争やフランス革命の影響により没落を余儀なくされた「小国」が、20世紀以降、現代に至るまで、寛容を尊ぶ国として再生していく様を描く。

桜田美津夫=著
中公新書/2017年



10 『新しいグローバルビジネスの教科書』

グローバルビジネスは、かつての先進国のマルチナショナルなビジネスから、途上国の低所得者(BOP)層を含む広域分業のステージへと突入した。日本が巻き込まれていくグローバル化の流れとその本質を、豊富な事例や体験談を交えながら、多角的な視点から包括的に考察する。外にビジネスを広げるための「グローバル化」を目指すうえで、まさに参考になる良著。

山田英二=著
PHP新書/2015年



1 『省察的実践とは何か』 ——プロフェッショナルの行為と思考』

「省察」とは、単に反省し振り返ることではない。プロフェッショナルが現場との対話から知を生み出すプロセスであることを、著者は実際の行為や会話の分析によって解明する。そうした知のあり方を阻む組織学習の分析も行い、省察を促す大学や協働で探求する公共の場の必要性を説く。

ドナルド・A・ショーン=著
柳沢昌一、三輪建二=監訳
鳳書房/2007年



2 『多文化世界〔原書第3版〕』 ——違いを学び未来への道を探る』

グローバル化が進み多文化理解の必要性が求められるなか、個人や組織は、どのように違いを学び、行動すればよいのだろうか。76に及ぶ国や地域での価値観調査に基づき、多文化世界を分析する。17カ国語で翻訳された世界的ベストセラー。

G・ホフステード、G・J・ホフステード、
M・ミンコフ=著
岩井八郎、岩井紀子=訳
有斐閣/2013年



3 『地域を活かすつながりのデザイン』 ——大阪・上町台地の現場から』

グローバル化や人口減少に揺れる地域で、どのように持続可能な「まち」づくりを行えばよいのだろうか？ 本書は大阪の歴史資源が集積した上町台地界隈でバックグラウンドの異なる主体が交わり新たな価値を生み出すダイナミズムに着目。ネットワークを軸にした未来型のまちづくりを提案する。具体的実践に基づく説得力ある一冊。

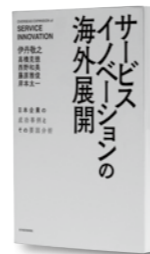
上町台地コミュニティ・デザイン研究会=編
創元社/2009年



4 『サービスイノベーションの海外展開』 ——日本企業の成功事例とその要因分析』

日本の産業の海外展開は、製造業からサービス産業へ拡大しつつあるが、高い成果をあげる日本企業はそう多くはない。今号で紹介した良品計画をはじめ、大戸屋、セコム、公文教育研究会の成功事例を論理的に調査・分析し、成功のカギを探っていく。そこから導き出された5つの要因とは？

伊丹敬之、高橋克徳、西野和美、
藤原雅俊、岸本太一=著
東洋経済新報社/2017年



5 『幸せってなんだっけ？』 ——世界一幸福な国での「ヒュッゲ」な1年』

世界でも人気のファッション誌『マリ・クレール』英国版の元編集者であるイギリス人女性の著者が、自らの移住体験をもとに北欧デンマーク流の幸せな暮らし方のヒントを伝える。新しいライフスタイルとして欧米で注目を集める「ヒュッゲ」とは？ 経済指標だけでは測ることのできない、これからの時代の幸福を考えるための格好の書。

ヘレン・ラッセル=著 鳴海深雪=訳
CCCメディアハウス/2017年



「CEL」バックナンバー



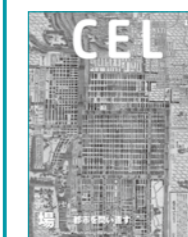
vol.118 2018年3月発行

特集
ルネッセ「耕」——文化を問い直す



vol.117 2017年11月発行

特集
ルネッセ「交」——交流を問い直す



vol.116 2017年7月発行

特集
ルネッセ「場」——都市を問い直す



vol.115 2017年3月発行

特集
外に出て「日本」を見直す



vol.114 2016年11月発行

特集
外から「日本」を見直す



vol.113 2016年7月発行

特集
学びを学ぶ

CELホームページ

<http://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容、「CEL」バックナンバーをご覧になれます。
※CELホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

Facebookページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

Volume119
July 2018

特集 ルネッセ 外に学び、つくり直す

2018(平成30)年7月1日発行

発行 大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人 池永寛明

企画・制作 熊走珠美

編集人 日下部行洋

編集 榎平凡社

アートディレクション
& デザイン okamoto tsuyoshi +

校正 榎アンデパンダン

印刷・製本 榎東京印書館

お問い合わせ窓口 大阪ガスビジネスクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2018 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複製
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を示すものではありません。

CELからのメッセージ 外に学びなはれ



多様な学びの場の実験として、グランフロント大阪で開催された「ナレッジキャピタル大学校」。会場は学び、語らい、談笑する人びとの熱気に包まれた。
撮影/宮村政徳

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長
池永寛明
Kenaga Hiroaki

スポーツの世界で考えられないことがおこっている。バドミントン、卓球、体操、フィギュアスケート、スノーボードなどで10代の若者たちが「楽々」と世界で勝つ。世界レベルの指導者を呼び、世界を練習拠点に、世界に勝つ練習方法を構築し、「世界基準」で中長期的に組織で臨み、勝つべくして勝ってくる。

なぜビジネスにおいて日本にスポーツ選手と同じような企業があらわれないのか? グローバル競争時代にもかかわらず、世界で勝つ企業が出てこないのか? 日本市場は巨大。だから今までどおりでも自分のいる間は大丈夫、しんどい想いをしても、外に出ていなくてもいい——このような内向きな「日本基準」では、ビジネスの「金メダル」は獲れない。友人の韓国の大学の先生から「日本から学ぶことはないとして、韓国企業の本視察が大幅に減った」といわれた。失われた25年といわれ、1990年以降の日本の失速が論じられている。日本はどうなってしまったのか?

世界のビジネスを大きく変えることとなる情報通信技術の意味を読み違え、「日本基準」に固執しつづけ、しかも最も大切な「日本の本質」が理解できなく

なった日本。日本のモノづくり現場は依然として「技術から始まり、技術でおわる」という高度成長期の日本のモノづくりのまま、「人から始まり、人でおわる」世界の流れに逆行する。

かつて日本はだれに対しても開かれた国であった。国内外からさまざまな人が集まり、新たなもの、異なるものを受け入れ、学びあい、侃々諤々^{かんかんかくかく}と、本音で対話しあって、いろいろな「コンフリクト」と向きあい、情報や知恵を結合して価値あるものを「形」にし、現場で試してみ、うまくいったりうまくいかなかったりというたくさんさんの経験に学び、考え、悩んで、革新と確信を積みあげ日本の独自性を創造しつづけてきた。そんな「学び」が日本で弱くなった。

昨年度の「ルネッセ」理論篇での日本の過去と現在をつなぐ作業を終えたあと、イタリア、オランダ、デンマークを訪ねてきた。本号でふれたように、多様な人々との対話を通じて数々の気づきと刺激と示唆、驚きと内省を通じて多くの学びがあった。日本に無いこと、日本が失った大切なこと、日本が培ってきた強み・本質を、外で学んだ。119号より3号連続で、「ルネッセ」実践編を展開していく。

